



文化の力

Vol.
04

— 知のフィールドへ! —

2020
March



特集

映画監督の安藤桃子さんに
聞いてみました!

高知県立大学文化学部編集発行



文化の力Vol.4 ~知のフィールドへ~

高知県立大学文化学部は、高知市中心部にあります。大学周辺は文教地区と呼ばれ、高等学校、オーテピア図書館、高知城歴史博物館など、多くの教育施設や公共施設があります。また、永国寺キャンパスから、よさこい祭りの舞台である追手筋や帯屋町も歩いて5分。観光資源にも恵まれた環境で、学生たちは学んでいます。

contents

1 巻頭特集インタビュー 映画監督の安藤桃子さんに聞いてみました!

- 07 特集 となりのゼミは何してる?文化学部とは
- 13 学生研究発表1 高知バルブ生コン事件を考える
- 16 文化学部生ってどんな人?
- 18 講義紹介
- 21 学生研究発表2 文化の維持と継承
- 24 文化学部で資格免許get
- 26 No Teacher NO University
- 28 卒業研究タイトル一覧
- 30 編集後記

小回寺の窓から 第9回

苦手を継続すること

教授 東原伸明

人間誰しも誉められたこと、出来の良かったことを続けることに苦はないです。しかし、苦手なこと、出来の悪かった教科でしかも、評価も散々であったものなどは、それを継続するのはなかなか難しいでしょう。

でも、「出来ない」と「やらない」と「別なこと」です。出来なかったことを諦めず続けることは、忍耐のいることです。一つ良いことがあります。出来なかったことが、後に出来るようになるということ。これは大事なこと、自分の可能性が広がります。自信がもてます。

例えば私は英語が不得意だったの

で、大学進学を機会に第一外国語を仏語にしました。そう決めて、すぐに後悔しました。文法は、英語の方が速かに楽なのに、これから新たに複雑な仏文法を修得しなくてはならないのか……頭が白くなりました。しかし、めげず動んだところ、「格変化」や「ジェンダー」など英語だけでは知ることができない内容を余得として得、「遠回り」は実は、学問的には「近道」だと気づきました。第一外国語を仏語にしていたおかげで、大学院修士進学も、語学で苦しむことなくパスできました。専門とする源氏物語の研究は、フランスからの輸入思想、テキストの理論に、皆苦しめられていました。私はJ・クリスティアの翻訳書なども、抵抗なく読むことが出来て、研究に活かせる、テキスト論者になってしまいました。

ぜひ継続を、苦手なことほど。

巻頭特集
インタビュー

映画監督の 安藤桃子さん

に聞いてみました！

学生だからこそ、聞きたい。学生たちに、届けたい。
私たち学生の「なぜ？どうして？」を、安藤さんに率直にきいてみました



インタビューを企画したのは、この5人！ ①氏名 ②出身県 ③高知について一言！

① 田岡里菜
② 高知県
③ 高知県外に進学した友達を羨ましいと思いつつも、よさこいは楽しいし軽のたたきは美味しいし土佐弁も一生抜ける気がせん！

① 加地哲
② 高知県
③ 好きな食べ物は茄子！茄子大国の高知に生まれて幸せ！

① 田中紀子
② 徳島県
③ 人生の4年間も高知で過ごすとは思ってなかった…。でも住んでみると、思ったより嫌じゃなかった！

① 山口美空
② 佐賀県
③ おいしい食がたくさんで、自然もいっぱい良いところ！

① 松原美穂
② 三重県
③ 新鮮でおいしい魚や食材の宝庫！魅力いっぱいの高知に来てよかった！

安藤 桃子

【プロフィール】

1982年、東京生まれ。高校時代よりイギリスに留学し、ロンドン大学芸術学部を卒業。その後、ニューヨークで映画作りを学び、助監督を経て2010年「カケラ」で監督・脚本デビュー。2011年、初の長編小説「0.5ミリ」(幻冬舎)を出版。2014年、同作を監督、脚本し、第39回報知映画賞作品賞、第69回毎日映画コンクール脚本賞、第18回上海国際映画祭最優秀監督賞などその他多数の賞を受賞。

2018年「ウタモノガタリ CINEMA FIGHTERS project「アエイオウ」監督・脚本。

高知県の映画館「ウィークエンドキネマ M」代表、「表現集団・桃子塾」塾長。

現在は高知県に移住。日本中から集まったアイデアと土佐の知恵を掛け合わせた文化フェス「カーニバル 00 in 高知」を2019年11月に開催。そこで集めた英知を、高知の地域活動として実現させ、未来へと繋げるプロジェクトにも力を注いでいる。



安藤さんにきいてみた 4つの質問

安藤桃子さんは、「高知はこれから最先端になる」という思いのもとで東京から高知に移住し、高知で活躍されている。なぜ、安藤さんは都会から移住されたのだろうか？なぜ、高知を選んだのだろうか…？高知での安藤さんの活躍を知るたびに、興味がわいた。

私たち高知県立大学の学生には、授業の一環として「地域学実習」という実習がある。この授業では、地域を活性化させたいという思いを学生が持ち、高知県内各地で、地域の活動に参加している。

高知県を盛り上げようと活動されている安藤さんに、同じ目的に向かって活動している私たち学生から、高知のことを問いかけてみた。すると、高知のことからはじまり、社会のこと、生きかたや考え方、いろいろなことを安藤さんは私たちに伝えてくれた。

Q1

なぜ全国47都道府県ある中の高知なのか？

真逆の極端なところに、魅力を感じた

安藤さんは、私たちにそんな風に語ってくれた。地元は東京のど真ん中、大都会で生まれ育ったという安藤さん。通っていた学習院も周りはいわゆるお嬢様ばかり。これが安藤さんの「当たり前の生活」だったそう。このような環境で育ってきた安藤さんからすれば、高知という、自然がいっぱいでご飯に困らない環境は魅力的であるばかりでなく、「確実に最先端になる！」と感じたそう。そして、それが安藤さんに移住を決意させた。

インタビューの私は、山があり、川があり、自然を身近に感じる環境のもとで生まれ育ってきた高知県民だ。この生

活が「当たり前」だが、都会の人には不便に感じることで多いのではというイメージがあった。私たちにとって「当たり前の生活」が、安藤さんには「魅力」になったのだ。

Q2

なぜ高知が最先端になるのか？

高知は、取り返しがつく

「四国の中でも特に四国山脈と海で隔てられた高知県は、他県に比べて残された資源がたくさんある。そこが高知の強み」と、安藤さんはいう。「効率を追い求めて非効率を排除しながら「走ろう走ろうって」、何かを踏みつけて上がっていく」という「文明」の発展にこそ遅れはとったが、その分自然や心が残っている。ここからまだ無い新しい未来をつくっていく。

「高知は取り返しがつきやすい。1度こぼしちゃった水は戻らないのと同じ」つまり、このまま突き進めば私たちの「文明」は終わってしまうかもしれない。でもその前に、「Uターンしよう！」って立ち止まったら、高知は資源が残っているから先頭に立つことになる。そして、「ここでUターンしたら、これから先、生まれるであろう、新しい形に間に合う」と安藤さんはいう。高知が最先端というのは、こういう意味なのだ。「地元の人が、そこにさらに気づいていくと、ひっくり返りの波が早く起きると思う」

さらに安藤さんは、3.11での経験を語ってくれた。

私たちにとって一番大切なのは、命。そして、命の根源は「食」。農業や、そもそもの自然の豊かさが何より大切であることが、災害があったことで気付いた人も多かっただろうし、人と人との間を思いやるやさしさを再認識したのかなど。

そして、「地球ごとみても、この先は、方向転換していかないと私達の「文明」は続かないということが見えた時代に、今、私たちは生きている。だから、大きな転換をしていく方向性を、今こそ仕組みを作っていきながら、更にそこに気持ちを入れていく、そういうことが必要なのかな、と」

一見、何も無いように見える高知も、安藤さんの目線でとらえれば、「魅力的で、新しい方向性をつくっていく」、そんな場所なのだと感じた。

Q3

高知県で、人と交流するとき大切にしていることは？重要視していることは？

コミュニケーションの超プロフェッショナルたちが高知県民。だから私は何も重視することはない

映画作品の舞台として、そして昨年は「カーニバル00 in 高知」を中心となって開催するなど、高知を拠点としてお仕事をされていることも多い安藤さん。高知に移住し、普段の生活の中でも高知県の人々との関わりが多いのではないかと思い、質問してみた。すると、安藤さんは、「コミュニケーションの超プロフェッショナルたちが高知県民。だから私がなにも重視することはない、『ああそうか、こういうことだよ。こうしたら、こういきやすいよね』って学ぶこと



ばかり。いい意味でみんなどんどん入ってくるから、ウリのないコミュニケーションがとりやすい場かもしれない」と語ってくれた。それは、安藤さんの高知での実体験にあるようだった。例えば、「子どもを連れていたら『かわいいなあ、これでお菓子でも買いや』って見知らぬおんちゃんが普通の日にお小遣いをくれたり、買い物しても『ついでにこれも持っていき』とか」

確かに、高知県出身の私からみても、高知県の人たちのいい意味でおせっかいな性格を私も小さい頃から感じている。知らないおじいちゃんおばあちゃんからお小遣いをもらったり…。それが普通、というより礼儀みたいなものだとも思っていたから、自分もついついそういうおせっかいな気持ちになってしまう。相手が幸せであれば、自分も幸せとを感じるのが高知県民かもしれない。他人だと割り切るのではなく、そこにいる相手が幸せになるようなことをしたい。そんな部分が継承されていくことで県民独特のスタイルが成立していくのかもしれない。

そしてさらに安藤さんは「高知の宴会スタイルや皿鉢料理の文化みたいな高知の文化にも県民性が表れている」と感じているそう。だれか一人がずっと料理をするのではなく、一皿に盛ってそれをみんな取り分けみんな揃って一緒に食べる…。それにも県民性を感じると安藤さんはおっしゃっていた。

Q4

地域学実習の際、学生は地域の方とどう接したらいいのか？

高知県立大学には、全学必修科目「地域学実習」という科目がある。この地域学実習は、学生が地域の問題を把握し解決の糸口を探るために、他学部の学生や地域の方々など様々な立場や考え方を持つ人々と共同で取り組む実習である。そして、この実習を通じて自らの視点や立ち位置を再認識することを目的としている。そのため、学生自らが主体的に地域の方々と交流を図る必要がある。高知県出身である私でも、地域の方と交流をすることに最初は緊張したし、県

外出身の学生も緊張して現地で戸惑ったという。私たちが感じた緊張の原因は、「学生がズカズカいっても地域の方は大丈夫かな…」ということ。高知の人々と交流してきた安藤さんに、その悩みを打ち明けてみた。すると、安藤さんからは「逆でしょ、入っていくのが礼儀」という答えが返ってきた。

コミュニケーションって何かというと、自分が本当に思い感じていることをまずは一生懸命に伝えること、だと思う。

例えば、ときどき見かける“おばちゃん”とのやりとり。「ああしなさい、こうしなさい、今からどう？とか、ときどき一生懸命におばちゃんが話してくれて、止まらなくなるんだよね。それを、もし私が遠慮して『はい、はい』って聞き続けたら、いつか『高知にいると超疲れる！』ってなると思う。だけど高知の面白いところは、『ちょっと今日は時間ない！』『ありがたいけど今、工作中!!!』とかすばーんっと言うと、相手も『あっ、ごめーん！』って、素直に反応してくれる。いじいじ引きずらない。竹を割ったようにすっきりしているから、こっちもちゃんと言える」

そして、安藤さんは、「コミュニケーションって、自分が本当に思っていることをどう相手に自分が嫌な気持ちを持たずに言えるかどうか」だと教えてくれた。例えば、「『ちょっと静かにしてよー』とかも、『怒り』のバイブレーションを持って言うから嫌な空気になる訳で」と、コミュニケーションそのものについて、具体的に説明してくれた。だから、安藤さんのいう、

たぶん、どんなこともすっきりと表現出来たら、みんな嫌な気持ちにならないよ。

も、すんなり理解できた。

私たち学生は、地域学実習の現場で、地域の方々と積極的に交流しようとするのは、図々しいことではないかと、考えてしまっていた。しかし思い返してみると、地域の方々といざコミュニケーションをとってみると、地域の方々は気さくにストレートに話してくれた。そうすると、実習をすすめやすくなったことを思い出した。安藤さんのお話から、自分たちが経験した地域学実習を改めて考えることができ、コミュニケーションの本質を教わることができたと思う。

理というか、人が生み出せることにも限界がある、っていうのを、自然を目の当たりにしていると感じるよね」

安藤さんは、他のインタビューで「空港におりた瞬間に感じた」とおっしゃっている。そして、今回のインタビューでも「ものの数秒で移住を決めた、高知が世界の最先端になるぞ、と思った」ともおっしゃっている。この真理を感じ取ったからこそ、「ここに住む」と決断したのだと、私たちも理解できた。

3

お金は食えない

「いちばん大切なって、命だよ。ね。そして命と切り離せないのが食、もちろん水も。それがなければ人は死んでしまう。そこに、プラスで供給してくれる他の命があると思うのだけど、それが今の社会で言えば、農業だよ。業ってつけると、なりわいになるから、お金に変わってくる。なりわいになった農業からはお金がないと作物は買えない。でも…」と、安藤さんは続ける。

高知は、昔から村を自分たちで耕して、山に生えているモノを採って、食と農、切り離せないコト、命と直結しているコトを大切にしている。それらを全く見落としながら来たのが我々の文明社会だと安藤さんは言う。

「だから、自然や命を保つという、当たり前をみながら、経済成長していければいい。中心を外さず、ここが絶対的なものとしてあるなかで、経済を成長させていく。お金を、愛を



MOMOKO's Talk



安藤さんとのインタビューは、2時間近くにも及びました。安藤さんは、私たち学ここでは、私たちのなかで、印象にのこっ



と関連付いて、より成長する。安藤さんは、それを「よりお得な成長ぶりを発揮する」と表現された。

自分が本当にやりたかったことと違うような気がしたり、それが今は不安に感じることもあっても、それはそれでいいんだと安藤さんに応援された気がした。そして最後に、こうも言ってくれた。

「好きと嫌いは、嫌い。をいっぱい知ったほうが、超好き。が分かる。だから、超好き。ってところにどんどんピンポイントを絞ってどんどんいくと、苦が苦と思わなくなってくるから。それが持つて生まれた資質だといえるんじゃないかな」

1

「肩書き」や「仕事名」は形だから、
買いたい物といっしょだよ。成長に繋がっていかない。

「出来事や形でみるのではなく、それぞれにフィットする、自分の「好き」や「幸せ」をみつめること。

そうすることで、人生で、落ちたとか、拒否されたとかいった出来事が起きてても、やりたいと思ってる自分の胸が熱くなることは変わらない。だから、肩書きや仕事が変わったとしても、最高に幸せでいられるし、ぐんぐん成長していける」

この言葉は、受験や就職活動の困難に立ち向かう学生たちにとって、とても励みになる言葉だと思う。形にとらわれず、自分のやりたいこと、胸の熱くなることを大切に、どんな環境でも自分の、楽しい。を実現し成長していく、という安藤さんの考えはとても素敵だと感じた。そんな安藤さんは、安藤さん自身のこと、胸の熱くなること、自分の幸せの方向。を高知で見つけたとおっしゃっていた。

2

高知で見えた本質

「自分が意見を言うほうが楽しい、ドキドキするなどが、そういう本

質というか軸の部分を、私は高知に来たから気づくことができたのかな。それを高知じゃない別の場所で気づく人ももちろんいる。でも、やっぱり自然がより多く残っていると、高知づく人のほうが多いのかもしれない。



king 大切なこと



生がわかりやすいように、言葉や表現をかえて、丁寧に説明していただきました。
た安藤さんの言葉や文章を紹介します！

4

嫌いをいっばい知ると、超好きがわかる

もって回していけたらいい。高知は、そういう。当たり前。の絶対的に中心においておくべきことが、ずれないできた。それは、この環境のおかげだと思う」

私たちは、そんな高知に住んでいるのだ。経済と農や自然は対立するものではなく、当たり前を再確認しながら、経済を回していくことが大切なのだと感じさせられた。

多くの大学生や高校生が悩むことに、「将来の夢がはっきりしない」というのがある。私も高校生の頃は、はっきりとした将来の夢が見えず、「大学で勉強している間にしたいことを見つけよう」という気持ちで大学受験をして、入学した。しかし、最初に学びたいと思っていた分野は、いざ勉強してみると自分が本当にしたかったことではなかったと感じたり、自分がイメージしていたのとは違っていたりして、自分は大学に来る意味があったのか、何か得ているものがあるのか、と悩むことがあった。

しかし、これに対し安藤さんからは前向きな言葉がでてきた。

「自分の全然期待外れのが起きれば起きるほど、自分の中で本当にやりたいことが分かってくる。私はこれがやりたかったんだ、って気付いていく」そして、そうすれば、今までちょっと違うなと自分が思っていたこと

田岡

私は、残念ながら安藤さんのインタビューに立ち会えませんでした。でも、インタビューの準備作業を担当し、安藤さんの事務所にご連絡したり、マネージャーさんとメールのやりとりをさせていただきました。この担当が出来たことは、私にとってとても良い経験になりました。また、インタビュー後には、録音を聞いて内容をまとめる作業に加わりました。実際に安藤さんにお会いできませんでしたが、録音を聞きながら安藤さんの人柄に惹かれると同時に、高知県民である私が高知県の良さを再発見することができました。このインタビュー企画を安藤さんが承諾してくださって、そして取材させていただくことができて、光栄に感じています。安藤さん、本当にありがとうございました！

加地

私は高知県出身で、高知の生活や県民性すべてが当たり前で、今まで生きてきました。安藤さんと話していると、安藤さんの考えと私の考えが真逆なことに気づき、それがとても興味深く感じられました。県外に出てみると地元の良さに気付くとよく聞けれど、高知県にいても県外の人のお話をきいてみると、こうも違うのだと実感できることがわかりました。今回のインタビューは、地元の“当たり前”が本当は“魅力”だったのだと改めて発見できる貴重な機会でしたし、今後もこのように様々な人と交流する機会を大切にしたいと思います。貴重なお時間を私たちにくださった安藤さんには、心より感謝しております。ありがとうございました。

//////// インタビューを終えて //////////



田中

今回、安藤さんのお話を伺って、たくさん納得させられる部分がありました。私は徳島県出身ですが、陸の孤島のような高知県に住むのだけは嫌だと思っていました。大学へ進学し、一人暮らしを始め、高知県に住んでもうすぐ3年になりますが、特別良かったと思うことは正直そんなにありませんでした。しかし安藤さんのお話で高知の魅力を知ると、高知の魅力ってこんな所だったのかもしれない、と感じることが出来ました。また、お話の中から安藤さんの人生観のようなものも伝わってきて、とても貴重な経験をさせていただきました。安藤さんには今回このような時間を設けて下さったこと、とても感謝しています。ありがとうございました。

山口

高知は、今でもなおつづく「木曜市」や「日曜市」が「農」の伝統を大切にしている習わしだと感じた。高知は加工品ではない、「ユズ」や「鰹のたたき」など自然の素材を活かした特産品が多いのが特徴で、命の根源である「水」が特に綺麗であるため、素材が育つのも不思議ではないと思った。

松原

安藤さんに、私の気づかなかった高知の素敵などところをたくさん教えていただき、高知出身の人も、そうでない人も高知のことを好きになるようなお話が聞けました。たくさんの人にこの記事を読んでいただき、安藤桃子さんのおっしゃる高知の魅力を広く伝えられたら嬉しいです。安藤桃子さん、貴重なお時間、素敵なお話をありがとうございました。

特集 となりのゼミは何してる？

文化学部では、文化学課題ゼミナールという授業が行われています。これは、私たちが普段「ゼミ」と呼んでいる授業で、3回生から2年間、卒業論文を書くために取り組む授業です。今まで以上に専門的な学習となるので、自分の興味がある分野のゼミに入ることが、楽しく学べる一歩だと思います。

そこでこの企画では、ゼミの雰囲気やイメージカラー、先生が研究者になった理由などを紹介します。ゼミってどんなもの？どこのゼミで研究しよう？と思っているみなさんに、高知県立大学文化学部のゼミについて少しでも知ってもらいたいと思います。

担当：上田泰、門矢佳蓮（うっちゃん）

- ①ゼミの人数 ②ゼミのモットー ③ゼミのイメージカラーとその理由 ④なぜ先生は研究者になったのか ⑤ゼミ生から一言！

英語学・国際文化領域

五百蔵ゼミ

- ①3人 ②コツコツ ③深緑：落ち着いた雰囲気があるゼミだから
 ④大学生の2年生の時から卒業論文の提出までずっとお世話になった先生に大きな影響を受けました。英語で書かれた学術論文の読み方を授業の中と授業外の自主的な読書会で丁寧に教えていただきました。その他にも、研究という点だけでなくそれ以前の基本的な物事の捉え方という点で大きく影響を与えてくれた先生方に習う機会に恵まれたことも、研究者を目指したいと思う心を強めることになりました。
 ⑤私たちのゼミは他のゼミと比べ少人数です。そのため、丁寧な指導が受けられます。楽しいことばかりではないですが、通常の授業では得られない知識や英語力が身につくので、将来のことを考えると絶対後悔しないゼミだと思います。



オバークゼミ

- ①6人 ②自分で判じる、考力を身に付けましょう
 ③透明、イメージカラーは空っぽの概念だから。
 ④勉強が好き、好奇心があって、読むことと書くことも好き。人間の「存在」は何より不思議な道なきことなのでそれをずっと調べたいと思ったから。
 ⑤自分の研究以外のことについてディスカッション出来るから好き

金澤ゼミ

- ①3回生4名、4回生4名 計8名 ②メリハリをつけて、コツコツ取り組む
 ③青：ゼミには、空の色のような清々しさと、凛とした雰囲気があります。また、ゼミ生一人ひとりが、英語の勉強に真剣に取り組む、やがて、それぞれの「花」を咲かせる時期を迎えます。ゼミは、その「花」の輝かしさを際立たせる役割を担っています。
 ④多くの先生方との良き出会いと、英語学の思考法が、数学の問題を解いているような感覚があり、理解できた時の達成感に魅力を感じたので。英語学を通じて、英語の楽しさ、面白さを伝えていきたいという気持ちで日々の仕事に取り組んでいます。
 ⑤卒業論文を期限内に確実に提出できるゼミ・精読を通じて、英語の興味、関心の幅を広げられるゼミ・英語を丁寧に読み進められるゼミ・コツコツ頑張る、継続は力なり、鍛錬を実感できるゼミ・計画的に自分のペースで勉強を進められるゼミ



溜ゼミ

- ①4回生2人、3回生6人(うち1人留学中) ②なし
- ③自主自律。ゼミ生が協力して学ぶのではなく、それぞれ個人で取り組むスタイル。ゼミ生各自の関心や取り組むテーマが大きく異なるためと思われるが、もしかするとそれだけではなく、教員やゼミ生の個性の問題かもしれない。
- ④人生の目標として、「知りたい」という知識欲を満たすことを優先したため、自分の関心対象を学びつつつけられるこの仕事を選んだ。
- ⑤「内容は難しいし、指導は厳しいけど、先生は人間的には優しい」(4回生談)



鳥飼ゼミ



- ①18名 ②「国際文化研究は世界を救う!」 ③「緑」:イギリスを表す「英」という漢字から連想される色 「オレンジ」:教員の持ち物に多い色 ④学生のときに履修した「文学批評理論」という授業の担当教員に影響を受けたことが始まり。大学院を出て一旦は出版社に勤めたのだが、社員の皆さんと本の話をしているうちに(出版社の人は恐ろしいほど本が好き)、「研究したい熱」が再発し、気がいたら会社を辞め大学院に戻って研究していた。
- ⑤「文献や文学作品を通して、わからない所は皆で教え合いながらイギリスについて幅広く学んでいます」(4回生) 「ゼミ生の数が多く、講読後の意見交換でも多様な考えが飛び出すので、自分の知らなかった発見がたくさんあって楽しいです!」(4回生) 「ファンタジー小説のピーターパンを講読したり、興味のあるイギリス関連の文献を読んだり充実しています」(3回生) 「イギリスの様々な歴史や文学作品について全員で学び、意見交換をしています。多様な観点からの意見が飛び交い、とても勉強になります」(3回生)

- ①3回生:3名+1名(3回生後期から4回生前期に留学後) 4回生:4名+2名(2名は、現在1年間留学中)
- ②言語、言語比較・対照、外国語教育の3分野の研究において日常生活でも常に疑問を持ち、考える。
- ③白、なんにでも染まることできる。
- ④一番の根幹は勉強家で大好きな父の影響。次の理由は、英国の中高等学校、大学(北欧についての研究)、大学院(修士号—翻訳研究、日本語教員、博士号—言語学)で勉強や研究をするうちにどの分野も好きになり、その面白さを他の人に伝える教員になりたいと思ったから。また、イギリスでの勉強は言語の面だけではなく、勉強法からすべてが大変だったが、その苦勞をバネに様々な分野を通し「多くの国々や分野の懸け橋」になりたいと思ったから。
- ⑤言葉が好きならば楽しい、やりがいのあるアットホームなゼミです。

向井ゼミ



ヨースゼミ

- ①3回生6人、長期留学から戻ってきた4回生1人、4回生1人 ②アンテナを張ろう
- ③虹色—虹の色の数は文化によっても違うが、十人十色ならぬ「8人8色」で輝く
- ④自分の母国と全く異質にみえた東洋の国の人々と話が出来たら面白い—そう思って日本学を選択。日本で修士号、母国で博士号を獲得してからは、研究の道へ。何とか続いたのは、日本という国と人々は知的好奇心を常に刺激してくれるからである。
- ⑤ゼミ生曰く、「お菓子も出るが、課題もたくさん出る」。使用言語は、最初は和英混交だが、徐々に英語の比重が増え、最後は、授業もレポートも発表も英語で。それでも、「入ればなんとかなる」、と。「おこしやす…」(今年は京都出身の学生が多いので)

日本語学・日本文学領域

井上ゼミ

- ①令和元年度は、4回生4人(男1女3)、3回生6人(男3女3) 計10人です。 ②明るく楽しく、堅実に、確かな国語力を培おう! ③検討中です。今のところ、ブルーにゴールドが候補です。 ④現代日本語学研究から出発し、これまで国語科教育、日本語教育に携わってきました。このように、教育者かつ研究者であることが「先生」の重要な条件の一つだと考えているからです。 ⑤とても優しい和やかな雰囲気、みんなが発言しやすく楽しく学べます。／言葉や教育に興味がある一人一人が自分の好きなテーマを持って、お互いに研究内容を共有できるので、考えが深められ、研究が進められるすてきなゼミです。／ゼミは、指示待ちでは何も進まず、主体的に取り組むことが本当に大切だあって実感しています。



①10人 ②しんどくなければゼミじゃない、楽しく、厳しく、コツコツと。③緑色。ゼミ生がいつも携帯している辞書『漢辞海』の色です。④子どもの頃から本を読むのが好きで、本を読んで食べていける仕事につくのが夢でした。また、大学で尊敬できる先生や先輩に出会ったことも大きいです。そうして勉強しているうちに、研究者になっていました。運が良かったのだと思います。実際の研究者は、本だけ読んで生きていけるほど甘いものではありませんでしたが…。⑤このゼミでは、漢詩を読んでいます。現在は、杜牧という晩唐の詩人の詩を全員で分担して読み進めています。語句の意味や用例などを調べ、発表や意見交換を通して詩の理解を深め、漢文を読む力をつけることが目的です。調べる・訳す・書き下すなどの課題が出るため、それらが速く、上手に出来るようになります。また、中国の歴史・文化・慣習も課題を通して知ることが出来ます。杜牧の詩を読んでいます。詩には引用や典故となるものが多くあるため、自然と関連する様々な文献を読むことになります。課題が終わると、自分を全力で褒めたくります。難しそうに聞こえますが、このゼミでは漢文が得意でなくても大丈夫です。(3年生一同)

高西ゼミ



田中ゼミ



①18人(3回生:3人、4回生~:15人) ②少しだけ背伸びをしよう!(背伸びした発言をするためには勉強せねばなりません。でも背伸びをし過ぎるとちぎれちゃう。そのバランスを考えてみて欲しい。) ③紺色:近代文学に対する先生の造詣の深さのイメージ。そして何より先生がよく紺色の服を着ているから。(3ゼミ生談) ④二番目に好きなものが一番続いたから(近代文学、三島由紀夫)。→小学生の頃に自然史博物館の学芸員に「昆虫学者になりたい」と告げたところ、「一番好きなものを商売にすると辛いよ」と返されたことが、今の「私」をかたちづけています。⑤自分の知識のなさを痛感する日々ですが、先生は最初抱いていた印象よりもしっかりと学生に向き合ってください。作業は大変ですが、学びも多いと感じます。(3ゼミ生) / 出来の悪い私ですが、先生は意外に優しく、怒られるというよりためになるアドバイスをもらえます。自分の頑張り次第でどこまでも(精神的にも)成長できると感じるゼミです。(3ゼミ生) / どうも、自分の頑張り次第でどこまでも(精神的にも)成長できると感じるゼミです。(3ゼミ生) / どうも、自分の頑張り次第でどこまでも(精神的にも)成長できると感じるゼミです。(3ゼミ生)

愉快的な田中裕也先生と愉快的仲間たちです。やること多いゼミですが得るものも多く広く楽しい毎日です。私達のゼミの1番の売りは先生の笑った時に見える上の歯並びの綺麗さですが最近黒のタートルネックもトップを争っています。ありがとうございました。(3ゼミ生)

①現在4人ですが、今の2回生が何人か入りそうです。②未知への挑戦!!(これは先生の座右の銘でもあります) ③コバルトブルーとエメラルドグリーン(沖縄の空と海の色です!!) ④話せば長くなります。大学時代に探検部に所属。ドラム缶イガダを造って、沖縄から九州までの漂流実験、登山、洞窟探検やダイビングなどを行っていました。2回生の時、硫黄島という無人島にかつて住んでいた人たちの暮らしと方言の復元をテーマに、徳之島と久米島、沖縄本島のフィールドワークを行ったことが、きっかけです。大学時代は、琉球列島の離島を無人島も含めて、くまなく巡っていました。卒業後は、ジャーナリストを目指していましたが、「そんなにフィールドワークをやりたいのなら、大学院を受験するか」と指導教官に勧められて受験したら、合格してしまいました。おかげ様で、好きなフィールドワークをやりながら、何とか飯が食える職業に就くことができ、今日に至っております。当時の指導教官に、本当に感謝、感謝です。⑤日本語学に関する様々なテーマに着目して学べます。少人数制のため、先生や他のゼミ生との距離が近いところが魅力です(I) / 日本語をいろいろな視点から見つめ、皆で議論することで、日々新たな発見をすることができます(K) / 方言と他方言、共通語との比較ができ、言葉の面白さを知ることができます(K) / 日本語を中心に、明るく楽しく皆でディスカッションできるゼミです。ゼミ生の話もしっかり聞いてくださり、的確なアドバイスをいただけます!日本語に興味のある方は、ぜひ一度、橋尾ゼミへ訪れてみてはいかがでしょうか?お待ちしております(K)

橋尾ゼミ



東原ゼミ



①4回生4人、3回生7人。ただし、毎回のゼミとゼミの行事に(京都葵祭、ゼミ合宿)、卒業生の高橋美由紀さんが参加してくださっています。②来るもの拒まず、去る者追わず。③先輩たちの背中を見ていることで、運営が継承されていく。「源氏物語」の講読する巻を、グループ(班)で資料を作成し、図書館で調べ、予習をし、毎週の発表をしているのですが、教員は、助言と了承をするだけで、学生が主体となってグループのノルマとする範囲から成すべきことすべてを決めています。いい加減だと、教員に叱られ、やり直しを命じられるので、たいへんですが、充実した時を過ごしています。二年に一度、京都の葵祭研修旅行に出掛け、全員参加の夏合宿(四回生課題研究ゼミナール=卒業論文中間発表会のため)は、毎年、いの青少年の家で行っています。期毎に、納め会(焼肉パーティ)をします。学問はどうか分かりませんが、よく物を食べるゼミだという伝統は継承されているようです。④「江戸の敵を長崎で討つ」ではありませんが、リベンジです。「できなかったこと(勉強が)」と「やらなかったこと(勉強を)」とは、別だと考えて来ました。「できなかった」けれど、そのことを放置せずに、辛かったですが、やり続けたことで、むしろ、そのことのオーソリティになってしまったというのが、本当です。「源氏物語」をことばの使われ方で分析する、言説分析、なんて面倒くさい研究でしょうか。⑤華珍園の中華、牛藩の焼肉。

地域文化・地域づくり領域

宇都宮ゼミ

①4回生7名(昼)4名(夜) 3回生8名 ②常に「問う」こと。
③明るい黄色。

学生とフィールドに出ると、学生がいる場所がいつも明るく輝いて見えるから。

④私は、昔から夏休みの自由研究や自主学習、工作が大好きでした。誰にも邪魔されずマイペースで好きなものをつくりたい…。そういうタイプの人間だから、研究者になったのかもしれません。

⑤それなりに課題も出るし、しんどいこともあるけど力はつきます!地域のことをもっと勉強したい方、ぜひ宇都宮ゼミへ!!!



①3人

- ②教員は、各学生の興味・関心を深めるお手伝いをします。ゼミ生同士は、仲良く、お互いを認め合い、ともに成長しあえる仲になってもらいたいと思っています。
- ③青。青い海のように、各自、関心があることを深めていければいいと思います。
- ④経済学部に進学し、勉強すれば試験ではマルはもらえましたが、果たして本当にこういう答えていいのだろうかとか、何かしっくりこなかったため、そのしっくりこないところを解決したいと思い、大学院に進学し、研究者になりました。
- ⑤「卒業のためにとりあえず研究する」スタンスと違い、自分の希望進路に深くかかわるどんなテーマであっても研究対象にできる「経済学」が軸なので、「本当に自分のためになる研究ができる」のがこのゼミの長所です。4回生も、沿岸漁業への就業やベトナムのイベント(!)など幅広いテーマに取り組んでいます。学生間の仲が良いだけでなく、教授も学生のテーマを理解して何度もマンツーマンでサポートしてくれる、風通しの良いゼミですよ!

大井ゼミ



大村ゼミ



- ①4年生:2人 ②文系・理系の取り合わせで、教員の支援のもと学生が主体的に学ぶ。
- ③玉虫色 理由:かかわる人ごとに異なる役割・効果を期待されるから。光の条件によって異なる色に見える「玉虫の色」と同じ。
- ④もとは天文学者になりたかった。大学の学生実験・先生の研究のお手伝い・サークルなどで、フィールド科学・探検への興味が高まっていた。学部4年生のとき、ヒマラヤ山脈の海外調査に誘われて参加した。そのとき、調査・研究の面白さと巨大な自然の動きの一端を知り、さらに研究したいと思ったから。その後は、そのとき最善と思われる道を精一杯努力して進んできた。また、多くの人達からの支援と幸運があった。
- ⑤私たちのゼミは、防災を中心にまちづくりや法律など、幅広い分野を研究対象としています。文化学部には幅広い分野があります。大村ゼミは、文系分野・理系分野を絡めて自由に学べると思うので、どちらにも興味のある方は一緒に学べたら嬉しく思います。

①15人。4年生8人、3年生7人。全員女性。

- ②根拠をもって論理的に説明をする。自分の頭で考える。自分の意見をきちんと言う。
- ③青。理由:清水先生の服は青色が多いからです。先生のオーラが青色のイメージです。目付きが鋭いので・笑(Aさん)。先生がよく青系の服を着ている気がする(Nさん)。清水先生が青色のイメージ(Sさん)。清水先生の色が青っぽい(Sさん)。ゼミ全体が落ち着いている感じがある(Yさん)。ちなみに、ゼミのイメージカラーについて、清水ゼミの場合、多数決で決めて、清水は去年、ゼミ生が華やかとよく言われたので、華やか=白と思って、白に投票したのですが、清水の1票だけでした(青12票)。
- ④社会が抱える問題の原因と解決法を考えたい、知りたいと思ったから。
- ⑤清水ゼミはアットホームで先生と学生の距離が近いのが魅力の1つです。何でも言い合うからこそ、よい研究ができると思います(Aさん)。とても楽しいゼミです(Nさん)。ゼミの雰囲気はアットホームだけど、自分の意見はきちんと言えるゼミだと思います(Yさん)。

清水ゼミ



観光文化・観光まちづくり領域

飯高ゼミ

- ①3回生10人(1名留学中) 4回生10人
- ②モチーは特にありませんが、3回生で各自が学術論文を読めるようになって、4回生でいい卒業研究を書いてもらうことを念頭に研究指導しています。
- ③特に定めておりませんが、ゼミ生の印象では「カラフル」(多様性の象徴)、「オレンジ」(教員の服の色)などのイメージがあるようです。
- ④大学生のときに勉強がしんどいしなかったからだと思います。
- ⑤「先生が何の飲み物を持ってくるかを、ゼミ生が当てようとひそかに楽しんでいる和やかなゼミです」「自分がやりたいことができるゼミです」「たのしいです」



梶原ゼミ

- ①4回生14名、3回生12名、夜間主4回生4名、合計30名
- ②計画的偶発性理論
- ③マリンブルー。理由、研究室のイルミネーション・ライトの色なので。
- ④セレンディピティです。投資家になるために株式投資の研究を始めたら、様々な偶然が重なって、大学教員になりました。
- ⑤卒論テーマは割と自由でなんでもできます!みんな仲良くわいわいやってます!飲み会アリ!!!!

小長谷ゼミ

- ①10人(4回生3名、3回生6名、お休み中で復帰が待たれている人1名)
- ②卒業研究は、タイムマネジメントをもとめられる長期プロジェクト。
- ③緑(ゼミ生アンケート7票、N=9名)3回生はグリーンツーリズムをテーマに勉強してきたから。よく田舎に行くから。穏やかなイメージがあるから。
- ④1.大学の仲間や先生と学問や研究の話をするのが楽しかったから。
2.有閑マダムになれなかったから。
- ⑤観光に興味があるなら、入ってみよう。いろいろ興味がわきます。一緒に学びましょう。優しい人たちがばかりで、居心地のよいゼミです!緩いけど、しっかりやることはやる!



三浦ゼミ

- ①4回生 5人、3回生 1人、研究生 1人(中国・北京)
- ②建築文化遺産に興味をもち、調査し、保存し、そして活用する。
- ③特にないので白色。すきな色に染められるから。
- ④大学院に進学することができ、修了できた。大学院の進学時点で不明確なところもあったが、他に就職する選択肢もなくなった。日本学術振興会特別研究員に採用され、高知女子大学に採用されたから。
- ⑤現在3回生が私一人なのですが、三浦先生は卒論の指導を親身してくださっています。

選択もなくなった。日本学術振興会特別研究員に採用され、高知女子大学に採用されたから。

吉川ゼミ

- ①人を数えたことがありません。
- ②でっ?
- ③無色。
- ④そんな恥ずかしいこと言えません。
- ⑤えっ?



現代法文化・生活法文化領域

LAW

- ①ゼミの人数(4回生)は2人
- ②ゼミのモットーは、正義と公平(学生の意見)
- ③ゼミのイメージカラーは、深緑。法学は、素朴で飾らない、落ち着いた大人の学問だから(学生の意見)
- ④子どもの頃、われわれが自由と民主主義の根づいた新しい日本を作っていかなければならないと思ったこと。憲法学の研究者になろうと思った直接のきっかけは、大学3年の春に当時出版されたばかりの憲法の教科書を読んだとき、その内容が全く理解できなかったこと。それ以来、勉学に専念し、わが国が自由な社会であることを確保する憲法解釈の探求に取り組んでいる
- ⑤社会が抱える問題を憲法学の視点から検討するのはおもしろいと思う。憲法という日常とは違う視点から研究するため専門的な知識が身に付き、それにより視野が広がり、普段何気なく見ているニュースでも問題に対する認識が変わってくる。ゼミで裁判員裁判を初めて傍聴し、とても貴重な体験ができた(裁判員の服装は私服で、私と同じ年代の人もいた)。しっかりと研究ができるゼミなので、安心してこのゼミに入ったらいいと思う。ぜひ来てください

岩倉ゼミ



菊池ゼミ



- ①昼間主が4年生6名、3年生2名、夜間主が4年生5名です。
- ②担当教員の専門は、民・商法の私法分野ですが、ゼミ生の卒論テーマについては、本人の希望を優先します(ちなみに、法学を担当する教員は4名で、それぞれの専門分野は、憲法については岩倉先生、刑法が田中康代先生、労働・社会保障法については根岸先生が担当されています)。社会問題はベストな答えがないものばかりですが、法を通じて、モアベターな社会の在り方を考えてみるのがゼミでの目標です。Accipe quam primum, brevis est occasio lucre. (卒論は早く完成させよ。作成する時間は短い)
- ③パステルピンクやオレンジ:暖かいor緩い(ゆるい)
- ④面白いからと恩師に誘われたのがきっかけです。本人が面白そうなことを研究するスタンスは、恩師からの教えでもありません。
- ⑤アットホームな職場です。自由なスタイルで学びたいことが学べるゼミです。

田中 康代

(法学研究室・刑事法/国際人権法)

根岸 忠

(法学研究室・労働法/社会保障法)

地域教育研究センター

石山ゼミ

- ①3回生:7人 4回生:3人
- ②研究を楽しむ心・課題追究
こつこつと地道に歩いていく
- ③虹色:一人ひとりの個性が輝
いているから
- ④研究と実践が好きだから
素敵な未来の先生を育てたい
から
- ⑤お互いに自分の探求心を高め
合っています。



清原ゼミ

- ①2名 ②「絶対現場主義」。地域の風の中に立ち、
地域のことを考える。
- ③赤。かつては、「清原熱血ゼミ」と呼ばれた時期があ
りました。
- ④19世紀のドイツにヤーン(F.L.Jahn)という体育実
践家がありました。ドイツ各地に地域スポーツクラブを
作り、愛国教育運動を展開して、ナポレオン支配下
のドイツを解放する運動に参加しました。この人に憧
れて、スポーツの歴史を研究したいと思うようになり
ました。今は、ヤーンを見習って、中山間地域の衰退
に立ち向かっています。
- ⑤実際に地域に足を運び、地域の方からお話を聞き、
地域の方々の暮らしのサポートをするために学生の
立場で考え、活動を行なっています。(4回生)

鈴木ゼミ

- ①3回生:3回生 8名、4回生 5名
- ②本研究室は教育学研究室ですが、学校、教育、および子どもに関わるトピックに広く関心を持つ学生を歓迎します。特に、担当教員の専門が「比較・国際教育学」という分野ですので、諸外国と日本とを比較研究することや、日本の学校現場で求められている国際理解や異文化交流について研究を深めていくことを期待します。研究にあたっては、実証的研究、つまり現地に赴き、現場の人々の声や意見に耳を傾ける方法を尊重しています。ぜひ、現場を自分の目で見て研究をまとめていって欲しいと思います。
- ③パステルイエロー、和気藟々とした雰囲気合っているから
- ④私は大学時代より比較文化を専攻してきました。比較を通して、お互いにあたりに
えと思いでいた文化の共通性や特殊性に気づくことは少なくありません。研究
を通して、東南アジア諸国をはじめとする各国の学校を訪ね、子どもたちの
日々の営みや人々が学校に寄せている思いに近づこうとしてきました。その際、相
手から自己の文化や教育について尋ねられ、気づくことが多々あります。みなさん
も、異文化に飛びこんで文化というものを探求してみませんか？
- ⑤教育や国際比較に興味がある人はもちろん、その他のテーマについてもみんな
で一緒に考えます!素敵なゼミやな(3回生より)



あとがき

自分のゼミ以外がどんな雰囲気なのかわりたくて始めた企画です。普段は自分のゼミしか見られないので、雰囲気だけでも体験できて楽しかったです。また、すべてのゼミを掲載するのは大変でしたが、返ってきたアンケートを見るのは楽しみにしていました。どのゼミのアンケート内容・写真も個性があっていいと思います。学外の方やこれからゼミを選択しようとする方に文化学部のゼミを少しでも知ってもらえたらいいなと思います。

(上田泰、門矢佳連)

哲学・倫理学研究室

高知パルプ
生コン事件を
考
え
る

高知パルプ生コン事件とは？

高知パルプは旭町で操業していた工場である。高知パルプの主な事業は、紙の原料となるパルプという植物繊維を木材から抽出するというものであった。パルプを抽出する際には大量の希硫酸を使用する。高知パルプは、この希硫酸を廃液として近くの小川に垂れ流していた。垂れ流された廃液は有毒ガスとなり、近隣住民を苦しめ、健康被害を引き起こした。住民は工場に操業の停止を求めたが、その願いが聞き入れられることはなかった。近隣住民の訴えに聞く耳を持たず、依然として操業を続ける工場に業を煮やした一部の市民が、高知パルプの廃液の排水溝に生コンを詰め、工場の操業を強制的に停止させたのだ。これがパルプ生コン事件である。

自然破壊と産業

ゼミ生A 私は、その被害を聞く前はある程度自然が壊されても仕方ないんじゃないかと思っていました。なぜかという、国や地方自治体を運営していくためにある程度のお金は必要なので、自然がちょっと壊されてしまっても、雇用が生まれるならばそれでもいいと思っていました。でも、予想以上にひどい公害でした。



▲江ノ口川と旭川の合流地点。水の色がくっきり違う。
（『よみがえれ!浦戸湾』より）

ゼミ生B 公害は許されることではありません。でも、公害の被害や自然保護運動があったことを地域の発展のためにアピールすることもできるかもしれません。そうしたことに全国が注目して、高知パルプと浦戸湾が「負の遺産」として、環境問題に関心のある人とか、興味本位で来た人たちを惹き付けるとなると、それはそれでまた別の価値を生むんじゃないかと思うんですよ。そうしたことを含めて、“経済的価値”って秤で浦戸湾を見てみると、汚染から回復した海という点も無視できないんじゃないかという気がします。

工場側への眼差し

ゼミ生C 高知パルプ生コン事件っていうのは、もう40年くらい経った今でこそ英雄譚というか、公害から江ノ口川を守った英雄がたって文脈で語られると思うんですよ。当時でさえそうだったと思います。でも、工場を解雇されて職を失った人たちがどんな声を上げたのかは、あまり表に出てこないと思います。どうすれば、そういう声を後世まで語り継ぐのが重要だと思います。なって思います。

ゼミ生B たしかに。40年くらい経った今、事件のことすら若い人たちには忘れられています。それをただのいい話として伝えていいのかどうか、もっと考える必要がありそうです。

道徳

ゼミ生F 高知パルプの近くに住んで、持ってる物がどんどん黒くなっていったり、自分や周りの人に健康被害が出たりという状況になった時に、話し合いしてもらえないし、どんどん廃液も流されてしまう。住民からすれば、そんなことは不幸以外のなにものでもないでしょう。道徳的に考えれば、許されるわけありません。



▲廃液の影響で黒く変色したキューピー人形
（『よみがえれ!浦戸湾』より）

ゼミ生E 哲学っていうのは、「道徳的ってなんだ?」とか「普通ってなんだ?」とかいう事を改めて問い直す学問だと思うんですけど。そうしたときには、普通の感覚というか、全ての人間に“共通の道徳規範”っていうのはないと指摘されることがあります。でも、哲学や倫理学をやる時にも、“普通”の感覚っていうのが凄く大事だと思います。この事件を考える時、何となく“普通”の道徳的意識みたいなのも忘れたいいけないと思うんですけどね。川や海を汚してはならない、自然を大切にしよう、という。

生コン事件の面白さ

ゼミ生G ここで、なぜ今になっても高知パルプ生コン事件が注目されるのか、何が面白いのか考えてみましょうか。

ゼミ生A 市民っていう非力なものが、大企業みたいな大きなものに立ち向かっていくっていう構図はやっぱり面白いのかな。

ゼミ生G 生コンを詰めるって事自体がそれまでに絶対になかった事ですよ。その行動自体が法律に反してる事だから。“法律を破ってまでやった”って事がやっぱり注目を集めてる要因なのかなって思います。

ゼミ生C ちょっと話は逸れるんですけど、僕信号は絶対守るタチなんです。でも、周りに誰もいなければそんなルール守る必要ないじゃないですか。むしろ、信号を守らない人にいちいち注意するような人って、信号を守る事が正義で、守らない事は悪だと、ある意味思ってると思うんですけど。でも、本当に正しい事ってなんだろう?って思うと、実は信号を守る事はそんなに正義でもない可能性があって。高知パルプ生コン事件はそれをよく教えてくれますよね。法を守ることが別に正義とは限らないと。法を守らない行為が正義として讃えられる事もあるという、凄い例だと思うんですけどね。そういう所が生コン事件の面白い所だなと思います。



▲1971年6月9日、生コン事件直後の様子
（『よみがえれ!浦戸湾』より）

正義

ゼミ生D ネットとか…ツイッターとかよく見てる人っています?ツイッターとかで悪い事をやってる人がいたら晒す、みたいなものがあるじゃないですか。“制裁”みたいな感じで皆「こいつこんなんですよ」って晒して、皆に知らせて誹謗中傷的にさせますよね。でもそうやって晒す事自体は正しい事ではないと思います。

ゼミ生B そついう晒しを正義だと思こんでいる人たちは、生コン詰めて、実力行使をしても、高知パルプの公害を止めた人たちとどう違うのでしょうか。どちらの場合でも、晒される人には、大体何か非があるんですよね。炎上した所以というか。高知パルプだってもちろん非があったじゃないですか。だから生コン詰められた訳ですけ。高知パルプ生コン事件の時は、実行犯の人も褒め称えられてたんですよね。この差異はどこから来てるんですかね？

田中F その件で実行犯の人たちが褒め称えられたのは、やっぱり、地域住民が助けたからであって、やっぱり現場を攻撃してる人たちがたまたま快感を得ているだけで誰も助かってないし、何も成し遂げられてませんよね。だから、炎上を外から見てる人からしたら全然褒められた行為じゃない。この違いじゃないかなと僕は思います。

終わりに

ゼミ生D 一つ思うのが、自然も産業が大事だなって。ついでに観光もだ。バランスが大事だなって思います。

ゼミ生E 高知は自然豊かだから余計に自然を大事にするべきだよな。どれかに偏るとどれかになっちゃうから。

ゼミ生C そついう、全部繋がってる

ゼミ生A 高知の自然を大事にするって、高知の現場で自然がうていう二択しかなくない。今はそつうなくて。むしろ、高知の自然を生かして、木材チップなんかを作ってね、工場を動かすみたいな、自然と共存するサイクルが作られているので。一番大事なのはそういうバランス感覚というかね、共生なんじゃないかなと思いますね。

今回私たちは、市民が行った生コンクリートを詰めた行動は許されるものであったのかをはじめ、様々な側面からこの事件について考えてきた。考えることではっきりとした答えが出るとは限らないが、自分自身について理解できたり、他人の意見を聞いて新しい考え方を吸収したりできる。「考えること」を私たちはこれからも大切にしていきたい。

浦戸湾を守る会事務局長・田中正晴さんにインタビュー！



Q.1 川が汚染されたことで、近隣住民の生活はどのように変化しましたか？

A.1 気付かない内に徐々に生活が変化していきました。テレビやアンテナが錆びるなど、電化製品や生活用品への影響もありました

Q.2 パルプ生コン事件は当時県外の人にどれくらい認知されていたか？

A.2 一般には伝わってませんでしたが、公害活動をしている人には認知されていました。当時県外でニュースを見た身としては、実力行使をした人が漁師などの当事者ではない人だったことに衝撃を受けたのを覚えています。



▲高知パルプ生コン事件について話して下さる田中さん

Q.3 市民からの訴えや公害防止協定があったにも関わらず、なぜ工場は聞く耳を持たず操業していたと思いますか？

A.3 お金儲けのためだと思います。使用を禁止されていた残りの2機をも稼働させるほどなので、操業をやめる気配は一切なかったと言えます。

文化学部生ってどんな人？

領域選択は
どう決めた？

(((学生に聞いてみた)))

どんな講義を
選択している？

将来については
どう考えている？

「文化学部で何をしているのか」

文化学部生ってどんな人がいると思いますか？外から見るだけではイメージがわかりにくいことがあると思います。幅広く学べる文化学部には、いろんな思いを持って学んでいる学生がいるのも魅力の一つだと思います。そんな文化学部生について少しでも知ってもらえるように、言語文化系と地域文化創造系の学生2人に「どんな思いで何を学んでいるのか」について聞いてみました！

教職・アルバイト・ボランティア。
様々なことに挑戦する井上さんに
インタビューしてみた

井上 涼香さん

- 出身地 高知県
- 主領域 英語学領域
- 所属ゼミ 金澤ゼミ



◀どんな授業の時でも忘れない
電子辞書・手帳・筆箱。
単語の練習は高校時代から
継続している。



◇学びの中で“面白い”を発見！

文化学部では言語、国際、地域、観光、法律など幅広い学問分野があり、自身が興味のある分野を選択し、学ぶことができる。その中で、井上さんは英語学領域を選択し、英語学研究室(金澤ゼミ)で学んでいる。分野選択の理由は、これまでの授業を振り返り一番面白かった授業が金澤

先生の「英語文法論」と「英語学概論」であり、その際英語を訳す・話すことだけではなく「英語を構造的に見る」のが面白く感じたからだった。

さらに井上さんは英語の教職課程も履修している。領域関係なく、地域、観光系の授業なども履修しているが、主に言語(英語)に関する授業や教職に関する授業を履修している。

教職課程では通常の授業にプラスして教職に関する授業を履修する必要があり、さらには模擬授業の準備や英語検定などの試験に積極的に取り組まなければならない。通常の授業との両立が大変だ。しかし、井上さんは大変なことだけではないという。教職課程の中で教える側に立つことで「先生って今まであんなこと考えながら私たちに授業をしてくれていたのかと気づくことができた、「先生の目線や立場から授業を考える」ことが面白い」という。

◇『自分に向いていることが見えてくるように』

「じゃあ将来、英語教員として働きたいと思っているの？」と質問してみると、「正直、迷っている…他の仕事に興味がある」という。その答えは意外なものだった。井上さんは中学校をきっかけに大学まで教員になりたいという思いがあり、県立大に来たのも「教員免許を取るため」と答えていたからだ。

具体的にほかに興味がある仕事というのは「受付、秘書、プライダル、アパレル、メディア…」など様々だった。やりたいことがそれほど沢山あることに驚いたが、そのきっかけはアルバイトや学外での活動からだった。1回生の頃からウエディング・アパレル関係でアルバイトをしている。その際に接客と笑顔が褒められ、「ずっと笑顔でいることが苦じゃない、得意かも」と感じたそう。アルバイトを続ける中で次第に「自分に向いている」と感じたそう。

さらに話を聞いていくと、井上さんはオープンキャンパスのアルバイトや薬物乱用防止の講習のための免許の取得、夏休みには高校生にレポートの書き方などを教えるTA(ティーチャーアシスタント)の活動もしてきたという。

教職課程にアルバイト、ボランティア…。学内外で積極的に活動をしている井上さん。なぜ、様々なことにチャレンジできるのだろうか。その理由を聞いてみると…

◇『まずは、やってみる』『大学4年間で何か成し遂げたい』

井上さんの中では「これでも全然できていない、もっとできることがあるのではないかと感じているとのこと…。「自分は短い期間で凄いなことができる人間とは思ってないから、少しずつ長い時間かけてやる必要がある」、「とりあえず、まずはやろう」と思うのだという。なんてストイックな人だ…。そして「今(大学生の間)しかできない経験をしたいから」とも。教職課程に関しては周りの人たち、同じく教職課程を履修している仲間の存在が大きく、「自分も頑張らなければ」と思えるのだそう。そして何より「大学で頑張ったことは？」と聞かれて何もないと答えることはしたくない、「大学4年間で何か1つのことを成し遂げたい」という気持ちがあるからこそ、続けることができているそう。

◇『過去の自分の存在』

それだけではなく、「過去に頑張ったことがあるから、これくらい頑張れるわ」という感覚がどこかにあるのだという。これまで、中学校、高校でも頑張ってきたから「今も頑張らない」と感じるそう。「過去の自分が応援してくれる感じ？」と聞くと、「過去の自分に負けないように、という感じ」、「中途半端なことはできない」という。井上さんのすごさは、常に自分と向き合っていることなのかな…と思った。



現在、1年間の韓国留学に行っている別役来望さんにインタビューしてみた

別役 来望さん

- 出身地 高知県
- 主領域 地域づくり領域
- 所属ゼミ 宇都宮ゼミ



「あだからこんな考えを持っているのだ」と、自分で気付きたいと思いました。その気づきの回数が、相手を理解することにつながるのではないかと思い一年の韓国留学に踏み切りました。

◇なぜ留学先を韓国に決めたのですか？

高校卒業間際に内閣府の事業で短期留学に行けるチャンスがあり、韓国を選択したのが韓国について知るきっかけとなりました。日韓関係には関心がありましたが、留学に向けて約半年間毎日のように韓国について歴史からすべて学んでいるうちに、心から韓国に

留学したくなり、真実を自分の目で確かめたいという思いが強くなりました。残念ながら、短期留学では不合格となりましたが、県立大学でも韓国留学が可能となり、絶対に韓国に行き、日韓関係や歴史について学びたいと考えていたので、韓国に留学しました。

◇今までどんな講義を選択してきましたか？

私が県立大学の文化学部を選択した理由は、地域だけにフォーカスをあてるのではなく、観光のほか、国際についても学べるところに魅力を感じたからです。そのため、授業も国際系と地域系の両方から主に選択してきました。どの領域(国際系、地域系)も自分の視野を格段に広げてくれたと思います。地域のことは分かっていたつもりでしたが、理解できていなかったことを痛感する部分も多々あり、高校生までにしてきた活動が本当に多くの大人や社会に支えられていたことを感じました。地域分野も国際分野も実践してみないと分からないことが多くあり、答えが一つではないので、「何を学んだ」、「これを学んだ」というのが自分の中にまだしっかりと確立できていない所もあります。それでも自分の考えを言葉にして相手にしっかりと伝える重要性は学びました。

◇なぜ地域づくり領域を選択したのですか？

私は、祖父が自治会長をしていたこともあり「地域のために何かをする」ということに興味を持っていました。そして、高校生の時に地域活性化活動の手伝いをさせて頂く機会が増えたことがきっかけで、より良い地域社会にするにはどうすればよいのか、など学問的に地域についてしっかり学びたいと考えはじめました。領域選択は地域系と国際系のどちらに行くべきか迷いましたが、自分が最終的にどこで主に活動したいのかと考えた時、地域で活動したい気持ちが強くあったため地域領域を選択しました。

◇韓国に1年間留学していますが、なぜ留学しようと思ったのですか？

私は国際という分野にも、地域と同等に興味がありました。地域というものは全世界に存在しているものであり、地域と国際は違うものに見えて違わないと考えているからです。実際問題、国際協力活動は、ある地域に入っていくものが多いです。日本と状況は違っていますが、外を知ることは内を知ることと繋がると考えています。正直一年間遅れるというのは怖かったです。しかし、日韓の問題や北朝鮮との関係についてたくさんの方から様々な意見を聞きたいと思ったとき、ただ会って聞くのではなく、一年間過ごしていく中で、

◇留学での大変なこと、面白いと思ったことについて教えてください

まず、大変なことは語学です。似ている単語も多くニュアンスで何となく伝わることもありますが、まだしっかりと意思疎通が取れずコミュニケーションができないのが大変です。

面白いことは、韓国人は割と思ったことをストレートに話してくるので会話をしていて気分が良く、面白いです。あとは、大学なのに学科ごとに運動会があり、その日に授業があってもほとんどの学生が運動会に参加しているのも日本ではあまり見られないことで面白いと感じました。

◇将来、何かやりたいことや目標などはありますか？

私は将来的に外国人や異文化と触れ合う機会が少ない学生のために外国人との懸け橋をおこないたいと思っています。留学をしたのは、今のうちに多くの海外と繋がり、自分のコネクトを増やしたい思いもありました。将来の仕事については、今はまだ悩み中でしっかりと決まっていますが、メディア系に行きたいと最近思うようになりました。今のメディアは何が真実で何がデマがよく分からないことがあると感じ、それなら自分で調べて自分で発信すれば良いのでは、と思うようになりました。誰かに何かを発信して真実を自分で表現するのはとても責任のいることだと思いますが、その分やりがいがあることだと思います。地域の活性にもつなげることもできるので、自分のやりたいことに一番近い職種ではないかなと思っています。



編集後記

このコーナーは、学生同士でも聞きづらいうちに外部の人に知ってもらいたい、そんな気持ちで企画したのが始まりでした。ですが、インタビューをしていくうちに、私自身の文化学部での学びを振り返るきっかけにもなり、学生視点で読んでほしい刺激がもらえるものになったのではないかと思います。また、二人の話から文化学部では幅広い分野を学べるからこそ、やりたいことを深めることも、新たに見つけることもできる、それが文化学部の魅力ではないかと思いました。(竹崎菜央)

今回お二人に貴重な話をたくさん聞き、私自身も改めて自分が何を学びたいのかを振り返る機会になりました。高校生の時この文化学部の存在を初めて知った私は、4年間ずっと文化の勉強だけするのかと思いましたが、実際は全くそうではなく、本当に幅広い内容の授業を受けることができている。文化学部を選ぶ理由はきっと人それぞれですが、4年間やりたいことを費やすことも、入学してから新たにやってみようと思えることも可能だというのは、文化学部の大きな魅力だと思います。(多屋千咲)

お二人へのインタビューを通して、同じ文化学部の学生の分野選択の理由や将来について知ることができました。幅広い分野の中で、「なぜ、その分野で学びたいのか」や「学生生活の中で成し遂げたいこと」など、そこには様々な学生の「思い」が詰まっています。このコーナーで、文化学部生の魅力が少しでも伝わればうれしいです！(堀智視)



講義紹介

高知県立大学文化学部では、様々な分野の授業が開講されています。共通教養基礎科目や言語文化系・地域文化創造系などの専門科目を受講することができます。今回は数ある講義の中から、言語文化系の「日本文学史」、地域文化創造系の「災害と法」をピックアップし、紹介します。

○菊池先生についての情報

■専門分野

○商法(保険法、海商法)

法学の中に民法という分野があり、またその中の分野として商法がある。その商法の中の保険法と海商法が専門。商法とは企業に関する法。

■文化学部での担当科目

文化と権利、生活と法文化、地域社会と法文化、災害と法、文化学課題研究ゼミナール、生活法文化専門演習 など

○子どもの頃の夢

おまわりさん(小学1年生)、漁師(小学6年生)

○法に助けられた出来事

2018年の大阪北部地震で被災したとき、罹災証明書や地震保険の手続きが早くでき、保険金の支払い等がスムーズに進んだこと。



菊池直人先生

田中裕也先生



○田中先生についての情報

■専門分野

○近代日本文学:三島由紀夫を中心とした戦後文学

担当している講義:近代文学講読、現代文学講読、文学、日本文学概論、日本文学史(近代)、国語科教育法Ⅲ など

○子供の頃の夢

昆虫学者。小学生の頃は捕食―被捕食の間で起こる進化(変化)について研究したかった。

大学生	高校生	中学生	小学生
ミシェル・フーコー「言葉と物」、ジャック・デリダ「グラマトロジーについて」↑「現代思想」が流行っていました。毎日日本屋に行つて、週に1冊、3冊は買っていました	平野啓一郎「日蝕」、東浩紀「存在論的、郵便的―ジャック・デリダについて」↑先をこされたと思いましたが(思い上がりでしたが)。	「カラマーゾフの兄弟」↑マジメに小説を読もうと思ったきっかけです。	「ファーブル昆虫記」か江戸川乱歩「黄金仮面」↑ピカピカ光っているものが好きだったんでしょね。

○人生本年表

人生を本で表す年表



災害と法

文化学部では、法律に関する講義も開講されています。様々な法律の講義がある中で、今回は、私たちの生活により身近な災害に関して学べる「災害と法」に関して、講義内容と担当教員を紹介します。

担当グループ：なおきんぐ（坂本・大村）

○講義の概要

「災害と法」では、授業の中で災害に関する法制度の概要を学び、その課題について皆さんと考えていきます。日本は様々な自然災害が多発する国であり、大規模災害を個人で対処するには限界があるため、国や自治体が私たちの生命や身体、財産を守るために、災害が発生する前の事前の対応や、発災後の救済、復興復旧に向けた措置を法に基づき行っています。これらの法制度について学んでいくことが本講義の目的です。

災害に関する法と一口に言っても、様々な領域に多くの関連法が存在しているため、「災害と法」では、日本における災害法制の基本的な考え方や全体像が見えるように、災害関連の法を網羅的に取り上げています。例えば、最近の災害法制の考え方として、国民に対して自助や共助が求められる点が挙げられており、全て公的機関からの援助に頼るのではなく、被害を最小限にするために国民相互に負担を求めることが法制度に含まれるようになってきています。またその他にも、被災後の生活再建に関する公的支援とその限界につ

いても法が定めています。そういった現行法制について知ったうえで、よりよい災害法制について皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

○授業の工夫

法律の授業の多くがそうなのですが、「災害と法」もまず法制度を学んだうえで、その問題点を考えるという手順を取ります。そして、法律というのは（ローマの昔から）まわりくどく難しく書いてあるものです。慣れないと意味も分からず、ちっとも面白くないです。さらに、災害法制の多くは行政向けの法律なので、いわばプロ用の法律であり、一番読みにくい法律分野かもしれません。そのため、法のエッセンスをなるべく平易に伝えられるように意識し、知ってもらうこと・わかってもらうことを第一に考えています。また、講義を担当するにあたって、担当者自身にとっても新しい学びや収穫も多かったりします。したがって、講義では、頻繁に法改正が行われる現行制度を、できるだけ正確に伝えることに気を配っています。



○先生のおすすめの本

本に関して…東日本大震災以降、災害法制関連の書籍も多く出版されています。その中で初学者向けにお勧めの本を以下にあげます。生き延びるだけでなく、被災前の生活を取り戻すことこそが重要です。そのような制度を作るにはどうすればよいか、考えてみてください。

①津久井進『大災害と法』（岩波新書、2012年）

コメント…若干内容が古くなり現行法制にマッチしていない点もあるのですが、日本の災害法制の大枠を捉える上で役に立ちます。

②塩崎賢明『復興（災害）—阪神・淡路大震災と東日本大震災』（岩波新書、2014年）

コメント…日本の災害復興の過程における課題、特に住宅の復旧復興の過程で、被災者に生じるさまざまな問題点を「復興災害」として指摘します。

「災害と法」 授業のスケジュール

第1回	はじめに
第2～3回	災害と法の歴史
第4回	災害法制の仕組み
第5回	災害と行政
第6～7回	災害に備える法制度
第8～10回	災害直後の法制度
第11～13回	復旧と生活再建
第14回	国際社会と災害
第15回	まとめ

菊池先生が思う 講義「災害と法」の ヤマ場

第11～13回の「復旧と生活再建」…人々が生き残った後、国が私たち国民に何をしてくれて、何をしていないのかということに関して、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。また、何を備えておけばいいのかなど、ぜひ授業の中で共有したいです。

○○○編集後記○○○

今回この講義紹介のコーナーを担当して編集していく中で、先生方が授業を行う上でどんな工夫をしていて、何を生徒に伝えようとしているのか、自分自身理解を深める良い機会になりました。それぞれの授業から学べるが多くなると思うので、視野を広く持ち、様々な分野に触れてみるのが大事だと思いました。

（坂本菜々子・災害と法担当）

このたびは、講義紹介のコーナーに目を通していただきありがとうございます。また、今回取材協力をしていただきました先生方にも、改めてお礼申し上げます。講義紹介のコーナーを担当すると決まってから、内容をどうするか、どの授業をどのように紹介するか、どのようなレイアウトにするかなど、たくさんの時間をかけて話し合ってきました。時には考えが行き詰まる事もありましたが、話し合いの過程でアイデアを出し合いなんとか完成できました。私たちが作り上げたものが形になってとても嬉しいと思います。

（大村樹・災害と法担当）

日本文学史(近代)

文化学部には、中国・古典文学などの講義があるなかで、田中先生は、近代日本文学の講義を開講しています。この講義では、様々な作品を通して、近代文学の奥深さを知ることができます。

担当：板垣・奥田（なおきんぐ）

重要なかで 重要な講義

第7回の「自然主義」についてです。自然主義という流派は近代文学の二つの達成点でもあるからです。「見たもの」を写し取るということは、不都合なものも写し取ります。田山花袋「蒲団」(明治40年)は自身に起こった女書生との事件を描いたものです。田山の写真付きで紹介すると皆さん気持ち悪がりますが、皆さんは自分にとって不都合なことが書けますか？

タイムスケジュール

- 1回 ガイダンス：文学史の方法について
- 2回 幕末／明治の文学
- 3・4回 言文致と近代文学
- 5回 〈科学〉(博物学)の視線と近代文学
土地を記述すること
- 6回 紀行文の近代自然主義文学と綴方運動
- 7・8回 自然主義文学
- 9回 生活綴方運動と文学
- 10回 近代の欠如(貧困と文学)
- 11回 近代の過剰(消費文化と文学)
- 12回 関東大震災と文学
- 13回 プロレタリア文学
- 14回 新感覚派と文学
- 15回 戦時下の文学



使用する教科書

教科書は特に使用していませんが、高校の「国語」の副読本である「国語便覧(名称は様々)」を持ってきてもらっています。文学史として非常に簡潔で分かりやすいことと、簡潔であることの危うさを理解してもらうためです。

学生に読んで欲しい本

- ☆小森陽「文体としての物語」(青弓社)
特に「ころ」を生成する心臓」を読んで欲しい。
- ☆泉鏡花「草迷宮」(岩波文庫)
一度はチャレンジしてみたい。
- 読めると楽しい。美しい。

講義の工夫

その学問の面白さについて考えるようにしています。この授業では「近代文学」とはどのようなようにして生じ、各時代で変化していったのかを見ていきます。例えば「お化け」が「幻想」の対象になったのでしょうか。実は明治以降西洋の「博物学」が導入されることで「見たもの」と「想像のもの」の境界線ができるようになってからです。近世の書物に書かれた「獅子」は角が生えていることがあります。実際に生えていたわけではなく、中国(明)で作られた「本草綱目」という事典的なものを、そのまま写し取ったために起こったことです。笑ってしまいそうになりますが、それは今の私たちの「常識」でしかないのかもしれない。

受講者の感想

日本の近代文学の歴史について、様々な思想の観点から理解することができた。先生の雑談も面白い。
科目名は日本文学史であるが、ただ文学の視点から歴史の流れを掴むだけではないため、その当時の世界の様子や思想などがすべて影響しているということが学べる。

編集 後記

講義紹介の記事を 作成するなかで、 教員が工夫してい る点など、学生側 からわからないこと を知ることができ て、私自身勉強に なりました。文化 学部は面白く、 様々な分野を扱っ た講義が盛りだく さんです。この講義 紹介が、それらを 探す足掛かりにな れば嬉しいです。 (奥田晶子・日本文 学史(近代)担当)

講義名だけでは、その講義で何を学ぶことができるのか、どのようなことをするのは難しいです。この記事を読んでも、地域の方々や大学選びをする高校生、もちろん県立大学の在校生にも文化学部の講義について少しでも興味を持ってもらえればと思います。
(板垣愛里・日本文学史(近代)担当)

文化の維持と継承

～JICA(国際協力機構)研修生とのディスカッションをおえて～

自分たちが持っている文化とはどういうものなのか

その文化を継承する
というのは
ということなのか

2019年5月31日、JICA(国際協力機構)研修生の淀好江さんと高知県立大学の学生(言語文化研究室・地域政策研究室的の学生、比較言語研究の講義受講生、イタリア人留学生)が、言語や地域文化の視点から「文化の維持と継承」に関するディスカッションを行いました。

担当:多屋(うめっこ)

継承するには
どうすればよいのか

外国人や移住者は
継承することができるのか

言語文化研究室では、テーマとなる「継承」について言語の視点から以下のような議論がなされている。

「継承」は「先代や前任者の地位をそっくりそのまま受け継ぐこと」と定義されており、親やその先祖、または自身より年が上の人、先輩などから、そっくりそのまま、身分・財産などを保持し、さらには後世や後輩にも受け継がれていくことである。しかし、言語は変化するものである。言語における継承とは、文法を継承することなのか、あるいは言語が使えることなのか。そこに明確な定義はない。だが、母語の継承は個人のアイデンティティの形成にかかわる大きな役割がある。

では、日系社会における日本語継承についてはどのように考えられるのだろうか。日本語学校での教育から見ると、日本語自体を教えることを目的としている学校ならば、日本式のしつけを重んじ、体育・書道・裁縫を行う。日本語能力試験の合格などを目指す学校であれば、言語構造を重視し、ここでは「継承」することを教育されている。日本語を外国で継承語として保持するのは、難しいことなのだろうか。

言語の継承の事例 議論に際し、
親から子への言語の継承事例を紹介。

父は中国系インドネシア人(インドネシア語母語話者)、母は韓国人(韓国語母語話者)、母とは韓国語で会話するが、家庭内共通語は日本語であるという子どもは、9か月の頃から週2回のペースで保育園に通う。2歳1か月ごろまでは日本語も韓国語の優劣つけがたいレベルであったが、2歳2か月に入ると日本語レベルが急速に上達。2歳3か月からは週3日保育園に通い、父はアメリカへ単身赴任。2歳4か月の時には風邪で2週間保育園を休んだことで母と2人家で1日中居韓国語生活のため、韓国語レベルが急成長した。2歳6か月になるとアメリカで親子3人暮らしとなり再び日本語の使用率が增加。母といるときも日本語が多くなっていった。2歳9か月の時に母と共に日本に帰国し、家庭では子どもが日本語で言ったものを母が韓国語に訳し、子どもがそれを繰り返す。絵本も日本語と韓国語を同時通訳しながら読み聞かせた。2歳11か月からは少しずつ韓国語が出始め、3歳1か月の頃には日本語から韓国語への干渉がみられるようになった。

このような事例から、言語自体の継承は可能であり、学習者の意欲や学習環境が整う必要があること、子に言語を継承させる場合は親が「教える」ことをしない限り継承は成り立たないこと、幼少期は特に家庭での使用言語が継承されやすいことなどが考えられる。言語に関しても、継承する「意識」を持つことが重要となってくるのではないだろうか。

継承語と現地語

継承語とは親から受け継いだ言葉であり、国際結婚の場合、父親の母語と母親の母語の二つの継承語がある。また、子どもの育つ環境で毎日使う言葉を現地語という。

ペルーと日本の関わり

JICA(国際協力機構)研修生の淀好江さんは、日本人の父と日系ペルー人3世の母を持ち、現在、ペルーの大学で日本語教員を目指している。ペルーは南米の中で日本人が最初に移住した国だといわれており、19世紀末、ペルー沿岸地域でサトウキビ・プランテーションによる製糖事業の拡大がなされ、その労働力として日本人約800人が海を渡ったことがきっかけである。次第に都市への日本人移民集中が強まり、商業等への進出がめざましい日本人はペルー人社会にとって脅威となり、第二次世界大戦に至る世界情勢の中、日本人移民に対する風当たりは強くなっていった。戦後、国交は回復し、日系人大統領を輩出するほど、ペルーにおいてかつてのような暗い印象はない。

淀さんは、5歳までを長崎で過ごし、その後ペルーで22歳までを過ごした。今回、日本の文化についての考えを深めることを目的に、日本に訪れた。

「私たちは文化を継承する責任者である」 文化には様々なものがある。

言語、祭り、食べ物、建物、経済…

地域や人により異なる文化を維持・継承していくためには、自分の文化を尊敬し、誇りを持つことが大切。自分の文化を大事にすることで相手の文化も大事にできるからである。また、文化の交流をするには、相手へのリスペクトと相手の文化を認めることが必要となる。



その後、研究室や学年を混ぜた3~4人ずつのグループに分かれてディスカッションを行い、授業の最後には各グループで出した意見を全体で発表しました。授業を終えた学生の感想や意見をご紹介します。

■文化学部 3回生 入交志保里

今回、ディスカッションに参加して、文化を継承し、広めていくためには、まず自分の国の文化を尊敬すること、誇りに思うことが大切ということに気づきました。そして、異文化交流をしたときに様々なアイデンティティを認めることで、自分にとっての新しい文化を受け入れながら、自分自身の文化と上手く調和させていくことの楽しさも学ぶことができました。これからの時代、ますます異文化に触れる機会が増えると思いますが、そうしたときに今回のディスカッションで感じたことを生かしていきたいです。

■文化学部 3回生 佐野幸帆

日本にいと、深くは考えない日本の伝統文化について、ディスカッションを通じて考える良い機会となりました。「文化を継承する」ことは、簡単なことではないと感じますが、自分の持つ文化に誇りを持つことが継承につながるのではないかなと感じました。自分の生まれ持った文化には、自分のよりどころのようなどこか安心するような要素があると思います。異文化の環境に囲まれたとき、それは自分のアイデンティティともなると思います。自分の文化を心に、異なる文化を尊重し、相互にかかわりあえることが望ましいと考えます。周りに当たり前日本文化が存在するからこそ、今我々はその文化を深く気に留める機会が少ないですが、どれだけ自分のいる文化を知っているだろうと考えたとき、いざ、異文化の方に尋ねられた時、自分の文化に誇りをもって語れるように意識していくべきではないかと考えました。2020年のオリンピック、2025年大阪万博など、異文化に触れる機会が多くなります。日本文化を広める良い機会でもあり、日本文化を我々が再確認できる良い機会にもなると思います。自分の文化を知ること、異文化理解への第一歩でもあると思います。どの文化が優れているのではなく、互いの違いを尊重できることが望ましいのではないのでしょうか。

「バイリンガル」とは二つの言語に関与している人ともいえるのではないのでしょうか。つまりは、二つの文化にも関与していると考えられます。どちらの文化もその人のアイデンティティであり、両方を継承していくことは簡単なことではないと思いますが、両方の文化を大切にしていく態度が重要ではないかと考えました。

■文化学部 2回生 柴田歩乃佳

「私たちは文化を維持することができているか」という問題に対して、できていないと考えました。言語文化については、私の出身は静岡県で、標準語を当たり前のように使い、話していました。しかし、高知県に来て、土佐弁や、その他四国特有の方言を話す友達と一緒に生活を



るにつれて、自分の言語が徐々に飲まれ、使われなくなっていくのがわかりました。始めは、「今、土佐弁を使って話していたなあ。」と感じていましたが、今やそれに対しても何も考えなくなっているため、言語面での文化は自分の中では維持できていないと考えます。行事文化については、私たちが、新年を迎えたとき、年賀状を送るということは昔に比べて減ってしまいました。しかし、「あけましておめでとう」を、SNSを使って発信しているためその文化自体が消えてしまったのではなく形が変わった状態で今も引き継がれているのです。これは文化の維持とは言えませんが、継承に当たるのではないかと考えます。

■文化学部 2回生 池田彩乃

自国の文化を相手に紹介することは、自分が話すことで自国の文化を継承することになるのに加え、相手が紹介したことを覚えてくれたらそれも文化を維持することにつながります。また、文化を継承する方法として、日本人が多く住んでいる地域には日本食レストランや日本の食材を置くスーパーなどがあります。これは、外国に行っても日本食や日本の食材を食べることで、日本の食文化を継承することになるからです。外国人との交流の中で、お互いの文化について話すことも方法のひとつであり、お互いに自国の文化と相手の国の文化を継承していることになるのではないのでしょうか。

■文化学部 2回生 柴田歩乃佳

始めのディスカッションで上記のように考え話し合ったうえで、「異なる地域で自分の文化をどう受け継いでいくか」ということですが、これは、私自身、消極的な考えしか出てきませんでした。現地に行けば、「郷に入れば郷に従え」という言葉があるように、自分の文化を主張しすぎてしまえば、そこでの生活は、まず困難になってしまうでしょう。とはいっても、そこで自分の文化をいっぺんは表さないと、消えてしまいそうな気がします。今の段階では、自分の文化を尊敬し、愛すること、誇りを持つことが受け継いでいくことの近道になると考えます。もしくは、その土地の文化と自分の文化を合体させて新しい文化を作っていくのはどうでしょうか。文化は不変のものではないので、良くも悪くもその環境に適した形の文化を守っていくことができればそれは受け継いだといえるのではないかと考えます。



移住先で自分のルーツである文化を継承するにはどうすればよいのだろうか

■文化学部 3回生 上田泰

わたしはまず、移住した先の文化と地元の文化を比較し、自分が持つ文化をよく理解することが必要であり、自分の文化のよいところ、悪いところを認識することで、自分の文化に誇りを持つことができるようになると思います。その結果、移住した先でも自分の文化を継承して保つことができるのではないのでしょうか。他文化を尊敬し、いろいろなアイデアを受け入れることで、自分の文化を継承していくにはどうしたらいいのかのヒントが得られることもあります。また、自分の文化をそのまま継承するのではなく、その時代にあった形に変えていくことも必要だと考えます。

■文化学部 3回生 秋友花野

自分が生まれた国の言語を忘れないように、本を読むことが大切だと考えます。自分に子どもがいれば、絵本の読み聞かせをすることで、自国の言語を伝えることができます。また、日常生活の会話のなかでも自国の言語を使用し話すことで、相手はその言語を覚え話すことができれば、文化を継承するということになるのではないのでしょうか。

■イタリア留学生 キアラ・ダリス

JICA文化交流に参加して、「文化を保存と継承」というテーマについて話しました。私のグループでは主に方言や祭りの話題が出ました。日本では、地元の人が方言を話すそうです。しかし、地域によって方言が違うので、同じ地元の人だけが理解できます。例えば、同じグループの静岡出身の学生は、静岡弁は話せたが土佐弁は全然わからなかったと言っていました。

イタリアにも日本と同じく色々な方言があります。しかし、一般的に方言を使うのは年配者だけで、若者は使わなくなっています(私も方言が話せませんがあまり使いません)。最近私の町では、方言劇場をするようになりました。内容は、新しい物語も古い物語も方言に訳して演技をするというものです。私は何回か見に行っただけがあり、とても楽しいと思いました。祭りについては、日本人学生は高知と静岡の祭りを教えてくれ、私はヴェネツィアのカーニバルという有名な祭りについて話しました。祭りは古い伝統を思い出すために行われているという結論に至りました。しかし、海外に行くとき、自分の文化を保

存するのは難しいかもしれません。その場合は、日本語を忘れないようにインターネットで本を買って読んだり、自分の国の人と連絡を取ったり、食べ物や料理を通じてでも文化の保存ができると思います。

■文化学部 3回生 門矢佳連

周りに同じ文化を持った人がいないと、継承は難しくなります。周りは違う言語で話し、違う食文化を持っているといった状況だと、自分の言語を使う、家以外で自国の食事をする場面がないからです。この環境で自分の文化を継承していく場合は、移住した先の人に自分の文化を教える、広めることが継承につながると思います。今回の淀さんの発表にもでてきたように、現地の友達の子どもなどに日本の料理の方法を教えたり、文化交流を行ったりすることで自分の文化を知ってもらい、興味を持ってもらう、そして一緒に継承してもらうことも可能なのではないのでしょうか。

移住した先で自分の文化を今まで通りに継承していくのは難しいです。しかし、この交流ディスカッションでヨース先生がおっしゃったように、自分の文化と移住先の文化のハイブリッドで、新しい文化を創り出すことも継承の仕方の一つだと思います。

最後に――

今回、文化の維持・継承をテーマにディスカッションを行い、改めて自分の文化について考える機会となりました。人々が自分の文化を大事にし、多種多様な文化を受け入れることは、これからの国や地域を超えた交流に必要なものであると強く感じました。



Q1.教育学部ではなく何故文化学部で教員免許を取ろうと思ったのか。また、そのメリットは何か。



Q2.教員免許を取る上で努力したことは何か。

A1 私は初めから教員を目指していたわけではなく、4回生で行った教育実習がきっかけで本格的に教師を目指すようになりました。元々国語が好きで、文化学部では様々な分野の授業を受けることができるので、その授業を受けた上で教職を取ろうと決めました。国語に関する科目でいうと例えば、近代文学・古文・漢文などは、教育学部よりも内容が専門的な授業を受けることができるのでさらに学びを深められると思います。また、文化学部はコースが教職に振り切っておらず、もし途中で他にやりたいことが見つかったら方向転換がしやすいので、挫折や不安に左右されずに気持ちに余裕を持って免許取得に取り組めるのも一つのメリットだと思います。

A3 小・中・高と、私の人生において大きな節目を迎えたときに常に携わってくれていた、非常に大きな影響を与え続けてくれたのが学校の先生という存在で、それが教員になろうと思った一つのきっかけでもありました。その先生方がしてくれたように、私も生徒一人ひとりと向き合い、生徒の頑張りや気づき、それを認めてあげられる先生になれたらと思います。また、私自身国語が好きなので、国語という科目の楽しさを生徒に伝えていきたいです。途中で他にやりたいことが見つかったら方向転換がしやすいので、挫折や不安に左右されずに気持ちに余裕を持って免許取得に取り組めるのも一つのメリットだと思います。

A4 文化学部は教育学部じゃないからこそ何か足りないと感じることもあったり、苦勞することもあったけど、逆にそういった環境で免許取得に取り組むことで、自分でどうにかしようとする問題解決能力や行動力が養われました。この文化学部で免許取得に取り組んだことで、地域社会などの教育に関すること以外の知識も身についたし、大学の先生も各分野に徹している方々なのでいろんなお話が聞けて視野も広がりました。

A5 ごく普通の当たり前のことですが、教員になりたいと思っている人は検定でも自分のやりたい分野でもなんでもないので、今勉強しておいて絶対に損はないです。学校以外でも、塾のアルバイトだったり、ボランティア等で生徒と関わったりすることで教えるという立場を経験するいい機会になるので大学外にも目を向け活動しておくべきです。あと、自分が何をしたいのか、方向性はどうかということに関しては早めに決めておくことが大事だと思います。そうすることで具体的に何を勉強すればいいのかが、何をすべきなのかを把握して取り組むやすいし、ボランティアに行ったりと余裕をもって行動できると思います。また、早めに目処を立てて多くのことに取り組んで経験を積んでおく、もし後々方向性を変えたいなと思ったときにその経験が選択肢の幅を広げてくれるし、いろんな道に進みやすくなると思います。

担当グループ：なおきんぐ(坂本)

文化学部で

文化学部では、小・中学校の教員免許を取得できた強ができるというのは多くのかし、具体的に何をすればるんだろう…と疑問を持つか。そこで、今回は実際に免できた先輩方にお話を伺っ

国語教職

川口美月さん

出身地：福井県
所属ゼミ：井上ゼミ



A2 学年が上がるごとに教員を目指す人が減っていき、周りも本当に教員を目指している人しかいなくなり、あまり勉強が得意ではなかった私は不安になることもありましたが、同じ目標を持つ仲間と励まし合いながら、自分なりにできることから取り組んで参考になる人の話は積極的に聞くようにしていました。模擬授業などは事前の準備が何よりも大事なので、手を抜かず、本番で活かせるように一生懸命取り組んだのは努力したところかなと思います。また、漢字検定や日本語検定は教員免許を取る上で必要な知識であり、この文化学部では両方2級以上取得しなければならぬという決まりもあって、教員採用試験を受ける上でかなり重要になってくるので頑張って勉強しました。

A1 自分が大学選びをする際に、教育学部だと教育心理や子供のことについての勉強が主体となり、教育学部でないところでは教科の専門性が鍛えられるということを高校の先生から聞きました。私は英語の専門性の方を学びたいと思ったため、文化学部で教員免許を取得しようと考えました。

4年間を通して英語という教科の専門性を学ぶことができたのはもちろんですが、地域学実習などの自分が興味を持っていなかった分野の授業も取ることができ、計画性を持って行動すること、広い視野で物事を見ることなどが鍛えられました。これらのことは、教員という職業に限らず、将来必ず役に立つと思っています。

A3 学校という一つのチームの一員として動けるように、その場での自分のポジショニングを見極めて働いていきたいです。

また、生徒には私たちが地域学実習でやったような主体的な活動をしてもらいたいと思っています。私たち先生はガイドをする役割で、生徒自身が主体的にみんなで協力しあいがら活動を進めていけるような教育をしたいと思っています。

英語教職

松尾湧斗さん

出身地：富山県
所属ゼミ：金澤ゼミ



A2 3回生までは授業だけで手いっぱいでした。本気で先生になろうと思いはじめた3回生の終わり頃からは、教員採用試験で加点してもらえる英検とTOEICにかなり力を入れました。1日3時間というノルマを立て、英語に触れない日を1日も作らないように努力しました。また、一般教養や教職教養への対策としては問題集を1冊買い、過去の問題と照らし合わせて傾向をつかんだり、教職に関する雑誌や新聞なども読んで知識をつけるようにしました。

A4 全体を通しては、そんなに大変ではなかったのを感じています。試験がだめだった場合は臨時講師として2、3年働き、教職としての適性を自分で見極めて、それでも教員になりたいと感じたらまた頑張ろうという思いだったので、逆にリラックスして試験を受けることができたのかもしれない。

実際に試験に受かってからは、先輩や教育実習先の先生から教員という仕事のマイナスな部分の話や、より現実的な話を聞き、少し不安になることもありましたが、教育実習に行った際の生徒の元気な挨拶や授業に対する学習意欲、勉強以外での生徒との交流を通して、明日も頑張ろうと思える自分がいました。今の私にとっては、このように教育実習で感じたことが、教職という仕事に対するやりがいなのかもしれないと考えています。

A5 教科の専門性は、教養よりも鍛えた方がいいと思います。国語も英語もそうですが、文法や単語は自分が思っている以上に取り組んだ方がいいです。また、新聞や本など様々なところにアンテナを張り、何に対しても自分の意見を持てるように訓練をすることが必要だと思います。しっかりと自分の意見を持ち、常に考えながら自分から行動できるようにすることが大切です。

教職課程 全体のスケジュール

- 1回生 ○10月 教職専門授業開始 ○2月 教員採用試験模試(希望者)
- 2回生 ○2月 教員採用試験模試(希望者)

Q3. 将来どんな先生・公務員になりたいか。

Q4. 今まで免許取得に取り組んでみての感想

Q5. これから免許取得に取り組む後輩へのアドバイス



A1 私は、日本教員養成プログラムを受講し、授業や与えられる課題をこなす中で、日本語の教え方だけに限らない様々な知識を得られたし、分からないこと・知りたいことを、自分で調べたり、考えたりする訓練にもなりました。また、何も免許を取得しなくても卒業できる文化学部だからこそ、免許を取得しておけば自分の強みを増やすことができ、将来の選択肢を広げることができるのもメリットだと思います。

A3 私は、卒業後すぐにかどうかはまだ分かりませんが考えているところですが、いつか実際に日本語教師として働きたいと考えています。また、仕事ではなくても、今後外国の方と関わる機会があるかもしれない。そういう場面でも、授業で学んだこと、実習で学んだことが、コミュニケーションに役立つと考えていますし、生かしていきたいです。

A4 初めは、興味本位が半分以上でしたが、受講していくうちに、将来の進路として本格的に考えるようになりました。また、実際に働いてもらいたい先生方から技術や教える上で大切なことを学べただけでなく、実際に生徒の前に立って教えることが出来たことや、実習自体を乗り越えたという達成感も得られて、以前より自信が付き、と思っています。そして、月並みですが、このプログラムを通して、自分の見えていた世界が大きく変わったと感じます。世界中の様々な言語に興味を持つようになったし、言語を通して見る世界はとても面白いと知りました。また、出身地も言語も文化も違う方とたくさん知り合い、人それぞれ違ったバックグラウンドを持っていることを改めて意識し、受講以前に比べて、良い意味でより一層日本人も含めて他人とのコミュニケーションに気をを使うようになったと思います。

A2 1番は、留学生や地域の外国人の日本語学習者の方と積極的に関わることです。チューターとして留学生と遊びに出かけたり、課題を手伝ったり、また地域の日本語教室にお手伝いにかかせていただいたりしました。そして日本語学習を手伝う際には、一体どこでつまづくのか、逆にどこは問題なく理解出来るのかなど、私自身も学びながら教えたりしていました。また、今は休学して、国際交流基金が派遣する「日本語パートナーズ」として、台湾の高校で、現地の日本語の先生のアシスタントという形で日本語教育に関わらせていただいています。

日本語教師

神野 悠さん

○出身地：愛媛県
○所属ゼミ：向井ゼミ



A5 是非機会を見つけて、留学生や日本語学習者の方と関わってみてください。先にも述べましたが、学習者と関わる中で、つまづきやすいポイントや、逆にその人なりの有用な勉強法などを知ることができ、自分自身もとても勉強になります。このプログラムには教育実習が含まれますが、教えた経験が少しでもあると、とてもプラスになると思います。また、チューターやボランティアとして学習者と関わり仲良くなればなるほど、もっと質問に自信を持って答えてあげられるようになりたい、もっと分かりやすく教えられるようになりたいというように、勉強の大きなモチベーションになると思います。

免許・資格 get!

校の国語・英語・日本語教員、公務員になるための勉強がご存じかと思います。しいいのだろう…どうやってな方も多いのではないでしょう。免許取得や勉強に取り組んでみました!

A3 公務員になれば、若者からの視点、意見などを求められると思います。また、大学で学んだことは、この仕事に必ず活かすことができると考えています。それらの知識や経験を活かして、積極的に意見をだしていこうと思っています。

A4 筆記試験で難しいと感じていたため、正直、受かると思っていなくて驚きました。面接で、地域のことをきかれた際、地域学実習の経験がとても話しやすかったです。

A1 文化学部では、英語、倫理、観光や地域など、幅広く勉強していくことができ、そのなかで、自分のやりたいことを見つけることができます。私が公務員を目指そうと思ったきっかけは、3、4回生で地域学実習やフィールドワークに取り組んだことでした。その中で、地域を学ぶことを楽しいと感じ、高知で就職しようと考えました。

A2 勉強をとにかくこつこつやることです。大学の授業が終わってから、夜に講座があるので、帰りが遅くなります。学校の授業に行きながら、公務員の勉強をする、両立することを努力しました。また、主要科目を重点的に取組み、苦手、得意を自分で判断して、勉強の仕方を工夫しました。

公務員

石村紗也香さん

○出身地：高知県
○所属ゼミ：梶原ゼミ

A5 勉強はもちろんですが、遊ぶこと、うまくストレス発散することも大事だと思います。4年になると友人と会う機会も少なくなってしまい、人との関わりが減ってしまいます。就活や勉強のことを相談できる友人と一緒にいる時間を大切にしてください。また、わくわくworkやジョブカフェは相談や面談の練習もしてくれるので積極的に活用すべきだと思います。



NO Teacher NO University



文化学部には様々な専門分野の教員がたくさんいます。皆さんは、授業以外での教員の姿を見たことはありますか？普段、教員と話す機会は少なく、教員に対して堅いイメージをもっていませんか？そこで、今回は主に国際関係の分野を教えているオバーク先生について学生に聞いてみました！

担当：秋友花野、濱田祐可く(うっちゃん！)



プロフィール紹介

- 名前
オバーク・アンドリュース
- 出身
アメリカ合衆国のミネソタ州
- 県立大学に来て何年？
4年
- 専門分野
哲学、応用言語学
- 主な担当科目
国際理解Ⅰ、文化課題研究ゼミナール、英語科教育法Ⅲ、英語ライティング、英語スピーキング、英語コミュニケーションⅠ、比較日本学Ⅰ
- 趣味
料理、娘たちと遊ぶこと
- 日本の好きなおとこ
丁寧で思いやりがある人が多い
- 学生にどんな姿勢で学んでほしいのか
積極的に自分の考えを主張してほしい



Oberberg Andrew

オバーク先生の人柄

「毒舌だけど、実は優しい」

- 相談や質問は歓迎してくれるなどいつも親身になって話を聞いたりアドバイスをくれる
- ツンデレでキレイ好き
- 冗談が好き
- レポートが終わっていない学生がいたりすると授業を早く終わらせてくれたりする

授業の雰囲気

「学生との会話の キャッチボールが多い」

- 毒舌やジョークで笑わせてくれたり、先生のご家族の話がたくさんしてくれるので和やかで温かい雰囲気があります
- 真面目な雰囲気なところにいきなり、ネタやジョークをいれてくる
- 課題や話し合いが多いので真剣な人が多くて、授業らしい雰囲気
- 緊張感はないけど真面目に受けなければならないという雰囲気がある

授業の特徴

「英語」

- 基本的に英語で授業を進める。課題はほとんどなく、生徒に意見を聞いたり英語でのキャッチボールが多い
- 英語多用
- 一つの議題に対して生徒自身が自分で考え、全体で共有する事が多い
- 発表や話し合いの機会が多い面白い授業だと思う
- 基本は英語で授業、成績評価はテストではなく発表とレポート

オバーク先生の意外な一面

- 運動神経が抜群!?
3回連続でバスケットボールの3ポイントシュートを決めていました!
- 髪型とか変化に気付いて褒めてくれる

ゼミの様子

Q1.ゼミでやっていること

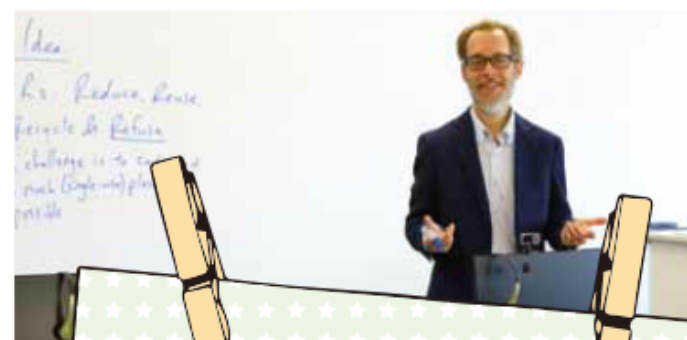
- 卒論についての話し合い、雑談、異文化交流
- 論文を読んで研究しディスカッションをする

Q2.ゼミの雰囲気

- 会話はほとんど英語ですが、全体的に和やかな雰囲気です。ゼミ生同士も壁がなく、ディスカッションなどを活発に行っています
- 和やかで和気あいあいとしています

Q3.どんな人がゼミに向いているのか

- 自分で計画を持って少しずつ課題に取り組める人、自分の意見を持って発言できる人
- 英語や哲学が好きな人
- 主体的に取り組む考えることが好きな人
- オバーク先生のことを好きな人
- 自主的に研究に取り組める人、自分のペースで卒論作成に向けて論文を書き進めたい人



先生から一言

Don't be afraid to be yourself, even if it's very different from others and from what's expected of you.



あとがき

この企画では読者の方に、大学にはどのような教員がいるのかを紹介するという目的で制作に挑みました。授業で関わることがない先生もいるので、企画のおかげで先生の意外な一面を知ることができました。大学の教員と聞くと堅いイメージを持つかと思いますが、文化学部の教員は優しい先生ばかりです。企画にご協力くださったオバーク先生を始めゼミ生の方々に感謝致します。ありがとうございました。(秋友花野)

「教員紹介」では読者にいかに分かりやすく、そして親しみやすく教員を紹介するかというところに重点を置いて作成にあたりました。そのために何度もやり取りを重ねて、完成に向けて一生懸命取り組みました。一筋縄ではいかないところも多かったですが、その分やりがいや学びが多くあり、無事に完成させることができました。協力をいただいたオバーク先生並びにゼミ生に感謝します。ありがとうございました。(濱田祐可)

英語学・国際文化領域	研究室名(担当教員)	卒業研究テーマ
	英語学研究室 (五百蔵)	Semantic Changes in the Vocabulary of the English Language from Modern English Through Present-Day English/With Special Reference to Amelioration and Pejoration A Study of English Textbooks and Audio Materials for Japanese Junior High School:Toward Better Sentence Stress Production Hiroshima Reported in the United States of America/With a Special Focus on Articles from <i>The New York Times</i>
国際日本学研究室(コース)	A Consideration of the Merits and Demerits of the Australian Working Holiday System for Japanese Youngsters Intentional Identity among Nikkei Emigrants in the Twenty-First Century:The importance of having and applying a cultural identity among Japanese-Paraguayan and Japanese-Brazilian communities.	
人間存在学研究室 (オバーク)	Taking immigrants in Japan : An Intercultural Future The Roles of Teachers to Support Students Psychologically after Disasters Have Occurred Creating a Better Educational System for Returnee Students	
英語学研究室 (金澤)	The Study of Onomatopoeias in Picture books A Study of the Sequence of Tenses in English A Study of Metalinguistic Negations in English The Semantic Properties of <i>Senior To</i> and <i>Older Than</i> in Comparatives in English	
国際関係研究室 (瀧)	ブラジルのエタノール外交:資源ナショナリズムの高揚のなかで 現代イタリアのポピュリズム	
英文学・ 英文化研究室 (鳥飼)	A Cultural Study of American Comics:Hero Image of Marvel works and How They Affect People ジェームズ・キャメロンの映画「タイタニック」を構成する要素とその意味について 映画「ティファニーで朝食を」のMoon river における“My huckleberry friend”が示すものとは エドガー・アラン・ポーの小説における仮死状態の考察 18世紀イギリスにおける児童文学分析 ―「教育」という要素を中心に― Seeing <i>Alice in Wonderland</i> through Lewis Carroll's life シェイクスピアの「麗い」 ―「マクベス」と「テンペスト」に表象された魔女・女性― ザ・ビートルズが1960年代の若者に与えた影響 第一波フェミニズムにおける日英フェミニズム比較研究 「ウォールフラワー」から見る若者の成長 「ライ麦畑でつかまえて」から見る翻訳の賞味期限 シャーロック・ホームズ作品における社会的影響力の考察 ～世紀末ロンドンの救世主～	
言語文化研究室 (向井)	日本語と英語の主語の対照研究 日本語母語話者の単語の意味における内省 英語と日本語の待遇表現の比較 日本語形容詞「かわいい」の意味と用法	

日本語学・日本文学領域	研究室名(担当教員)	卒業研究テーマ
	国語教育学研究室 (井上)	子どもの表現力を高める児童詩教育 ―児童詩集「やまも」の分析を通して― 生徒が主体的に話すことができる指導の考察 中学校国語教科書の研究 ―編修様式の変遷から見る国語科教育について― 中学校国語科指導におけるビジュアル・リテラシーの考察
中国文学研究室 (高西)	岑参詩研究 ―風景の描写を中心に― 元稹「鶯鶯伝」研究 聊齋志異研究 ―異類譚を中心に― 沈佺期詩研究 ―獄中詩を中心に― 杜牧詩研究 ―詠物詩に焦点を当てて― 杜牧詩研究 ―甘露の変時期を中心に―	
日本語学研究室 (橋尾)	北海道札幌市方言の言語変化に関する研究 ―世代差を中心に― 森見登美彦作品におけるオノマトペの研究 「源氏物語」におけるオノマトペの研究 介護現場における方言の応用言語学的研究 ―宮崎県えびの市方言を活用して―	
日本文学研究室 (東原)	六条院世界と明石の君 ―一族再興の論理― 六条御息所の情念 ―生霊として、あるいは死霊としての表出― 「まめ人」夕霧の人物造型 ―対比による機能的役割― 源氏物語の婚姻関係 ―配偶者としての紫の上を焦点に―	
日本文学(近代)研究室 (田中裕)	「美しくなりたい」の先にあるもの ―百田尚樹「モンスター」論― 壊れた時計と意図 ―星新一「愛用の時計」論― 災害ユートピアと母性神話 ―湧かなえ「母性」論― 島崎藤村「春」の成立 ―モデル問題をめぐって― 創られた宮沢賢治像 ―「永訣の朝」を中心に― 探偵小説ジャンルについて ―江戸川乱歩「狐島の鬼」論― 辞書を作ること ―三浦しをん「舟を編む」論― 創造される世界 ―谷崎潤一郎「人魚の嘆き」論― 笹井宏之の詩の可能性 ―現代短歌の「私」をめぐって― 夏目漱石「ころも」における私と先生との関係性 ―遺書はなぜ私に託されたのか― 金子みすゞの童謡詩の研究 ―植物が描かれている詩を中心に―	

地域教育研究センター	研究室名(担当教員)	卒業研究テーマ
	体育学研究室 (清原)	日本サッカーの強化に外国人選手・監督が与えた影響 「精力善用・自他共栄」を中心とする高納治五郎の柔道観
教育心理学研究室 (石山)	国語科における「主体的・対話的で深い学び」の授業分析と授業提案 不登校の子どもを養育する保護者の「社会的認識」に関する心理的变化 女子大学生の自己肯定感と感動体験の関連性	
教育学研究室 (鈴木)	女子ボートレーサーが応援によってもたらされる効果とファンとの向き合い方 ―アイドルとの比較を通して― Giving Guidance on English Writing in Elementary Schools 若者にみる流行歌の受容に関する実態 ―大学生に対する調査を手がかりに― ディズニープリンセスにみるジェンダー観の変遷	

■地域文化創造系

地域文化・地域づくり領域	研究室名(担当教員)	卒業研究テーマ
	経済学研究室 (大井)	沿岸漁船漁家の漁労所得の推移と変動 ー沖合・遠洋、養殖との比較と高知県高知市の一漁家の事例ー BOPビジネスの展開先として分析するベトナムの興行 ーBOPビジネスの事例や日本の興行の分析を踏まえてー
地理学・地理学研究室 (大村)	高度経済成長期と防災 ー宅地開発に着目してー 文化財と防災 ー建造物の耐震化において重視される「文化的価値」と「人の安全」ー	
地域政策研究室 (宇都宮)	商店街の現状・課題と解決策 ーまちバルから見るー 働く側から楽しんで接客をするためには ーラグジュアリーホテルを題材としてー 犬の殺処分を減らすためには 中山間地域の移動環境の衰退問題におけるコミュニティカーシェアリングの有用性 高知県における今後のゆるキャラの活動提案 ー高知県庁「くろしおくん」を題材としてー 「関係人口」による地域活性化とは 「持続可能な観光」は実現することができるのか ー京都を事例にー 高知県中山間地域における集落活動センターの活動事例と課題 公共図書館の地域的役割の変化とオーテピアの可能性について	
政治学・政策分析研究室 (清水)	内戦による子ども兵士の動員 地方自治体と地方空港におけるLCCの誘致 未婚者のニーズと企業連携による結婚支援事業 ー未婚者の意識調査と自治体の結婚支援事業の分析ー 廃校と地域資源を活かした観光施設 ー廃校活用プロセスと成果の分析ー 子宮移植の実現可能性の検討 ー子宮移植における不妊治療と臓器移植の側面からー 企業における女性の働きやすさ ー企業の規模と業種間の違いー 地域子育て支援拠点事業による母親の心のケアの効果 芸能事務所による支援活動の効果 ージャニーズグループの支援活動の分析ー	

観光文化・観光まちづくり領域	研究室名(担当教員)	卒業研究テーマ
	観光地・観光まちづくり研究室 (小長谷)	急速な観光地化が生じた地域における街の変化の実態 ー兵庫県朝来市和田山町竹田の街を事例にー 沖の島から見る離島における持続可能な観光と観光まちづくり 和田山町竹田と生野町の比較から考察する持続可能な観光
居住文化研究室 (三浦)	四国道路の札所と温路道の保護と活用に関する研究 四万十川流域の文化的景観と観光に関する研究 南国市における庵舎群の保存と観光資源化に関する研究 いの町の歴史的町並みの保存に関する研究	
文化人類学研究室 (飯高)	ゲームを原作とするアニメの聖地巡礼 ー「刀剣乱舞-ONLINE-」を事例にー 現代日本における親孝行と介護をめぐる葛藤 地域社会における多文化共生の試み ー愛知県豊田市保見ヶ丘を事例としてー 観光化を通じた地域文化の再創造 ー広島県三次市の瀧川文化を事例としてー 観光活動に活かされる高知県の文化 ー四国道路の接待と「おきゃく」文化を事例にー 農泊と地域活性化 ー高知県四万十市を事例としてー 日本人像の排他性 ー文化的市民権を手がかりに 日本の郷土料理の伝承と観光資源化に関する研究 ー高知県の皿鉢料理を事例としてー 日本社会における怪異の想像力と身体感覚 昭和ノスタルジーと観光現象 ー豊後高田市「昭和の町」を事例にー ペルー・クスコの植民地史とケチュア語復興運動	
企業分析研究室 (梶原)	高知県における喫茶店・カフェを活用した地域活性化の可能性 スタジオジブリがアニメ業界に与えた影響とは なぜ「女子」をターゲットにするのか 仁淀川における観光公害対策 ーこれからの仁淀川観光を考えるー 高知県におけるクルーズ事業発展のために 地場産化粧品存在意義と展望 遊女の歴史と女性の労働 プロ野球球団経営の現状と今後 2.5次元業界の商業的魅力とこれからの展望 旅行会社の種類と特徴 ー複数の会社を比較し、これからの旅行業界を考えるー 土佐のおきゃくからみる高知の魅力 ー酒文化から見出される観光の可能性を考察するー モーニング娘。の商業的魅力と今後の展望 ブラック企業をなくす方法 映画館のあり方 バー業界の概略とバーのビジネスプラン 四国における新幹線整備実現の可能性 位置情報活用の改善点に関する検討	
哲学・倫理学研究室 (吉川)	植物と動物を食べることについての倫理 芸術作品の正しい価値づけについて ー菱田春草の作品を例にー BLコミックから見たポルノ批判の考察 死刑制度の是非について ー日本の現状をふまえてー 「人を殺してはならない」という道徳規則を考える パロディ表現における「表現の自由」 日本において安楽死は認められるべきか	

現代法文化・生活法文化領域	研究室名(担当教員)	卒業研究テーマ
	憲法学研究室 (岩倉)	性別変更と生殖腺除去手術の強制について 裁判官の表現の自由 ーSNSでの投稿を理由とする懲戒ー 法人格否認の日中比較 ー中国会社法63条の検討を中心にー 自殺と賠償責任 ー空き家損害問題を例にー
民法学研究室 (菊池)	医療における子どもの自己決定権 行政の空き家解体の費用負担について プラットフォームと個人情報 災害法制の自助 地震保険について 多胎児育児の課題と公的支援の在り方についての研究	

秋友花野

今回『文化の力』を制作していく中で、どのようにして文化学部の魅力や学びを知ってもらうのか悩み考えながら制作しました。初めて冊子を作るということもあり、企画の趣旨や目的、レイアウトまで初めて経験することばかりでしたが、自分たちが納得のいくような冊子ができたと思います。ぜひ、『文化の力』を手にとって文化学部について知ってもらえたら嬉しいです。貴重な体験をありがとうございました。

板垣愛里

「文化」の範囲はとても広く、その分学べることも多いです。この『文化の力』には、学生のリアルな声や先生方の授業に対する思いなど、今の高知県立大学がたくさん詰まっています。受験を考えている高校生だけでなく、地域の方々にもぜひご覧いただきたいです。

私自身も、今回のこの『文化の力』の作成にあたって、文化学部についての理解を深めることができました。協力してくださったすべての方々に感謝致します。ありがとうございました。

上田 泰

『文化の力』は文化学部の学生が協力し、一から作成した広報誌です。本学生は勿論、高校生や地域の方々にも親しんでもらえるよう工夫しました。本誌を読んで、文化学部の活動や魅力を少しでも知っていただけたら幸いです。誌面作成に協力して頂いた方々、そして本誌を手にとって頂いた読者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。『文化の力』が、より多くの方に愛読されるものになるよう願っております。

奥田晶子

「文化学部とは？」という疑問への、答えが詰まっています。全員で協力し、悩みながら作り上げました。ぜひ『文化の力』を通して、文化学部について少しでも知っていただけると嬉しいです！最後に、記事作成に協力してくださった教員、学生の皆様、本当にありがとうございました。

加地 晋

私も入学前、文化学部ってなににするのか本当に疑問だらけでした。『文化の力』を一から作成して、3年生になった今改めて考えるいい機会になりました。また、安藤さんに貴重な機会を頂き、私個人としては高知の良さも再認識できました。これから入ろうとしている受験生のみならずや在学生がこれを読んで文化学部の魅力的に思ってくれたら嬉しいです。

門矢佳連

冊子を作ることは初めてで、本当につくれるのか不安でしたが、企画提案、アンケート回収やレイアウトなど、自分たちでやってきたことが形になった時はとても達成感がありました。このような貴重な体験ができ、大変光栄に思います。また、この文化の力で、本学生や学外の方に文化学部をもっと知ってもらえたらうれしく思います。協力してくださった先生方、ありがとうございました。

坂本菜々子

『文化の力』の制作に取り組む中で、アポイントメントを取ったり、インタビューをして原稿を書いたり、貴重な体験をすることができました。雑誌の制作に必要な情報を集めているうちに、自分自身気づいていなかった県立大の魅力にも気づくことができ、高知という場所で学ぶことの良さを改めて実感しました。この文化の力を読んで、たくさんの人に県立大のことを知ってもらえたらいいなと思います。

田岡里菜

私は実際に大学生活の参考にした『文化の力』を学生が制作しているとは知らず、自分たちが作る時知った時は完成の想像が付きませんでした。アポイントメントを取るなど、全てが初めての経験でしたが、とても大事な経験になりました。全員がより良いものを作るためにそれぞれが努力した『文化の力』を多くの人に手に取って頂けたら嬉しいです。この雑誌の制作に協力してくださった方々に感謝致します。ありがとうございました。

竹崎菜央

『文化の力』の制作は、雑誌編集という新しい学びができただけでなく、今までの学びを振り返る機会にもなりました。また、普段聞きづらい同年代の学生のリアルな声を聞けたことは自分にとっていい刺激になりました。本雑誌を学内外問わず多くの方に読んでもらい、文化学部の魅力を少しでも多くの方に知ってもらえると嬉しく思います。

作成に協力してくださった方々に感謝致します。ありがとうございました。

多屋千咲

雑誌を作るということを知った時は、今後の作業の想像がつかず不安でいっぱいでしたが、企画や構成を考えたり、文章を作成したりと、それぞれの作業はとてもやりがいがありました。初めてのことも多く模索しながらではありましたが、全て貴重な経験になりました。「文化学部とは何か」を、高校生や地域の方々、読者の皆さんにしっかりと伝えられる1冊になっていると思うので、たくさんの人に手にとっていただけたら嬉しいです。

濱田祐可

最初に『文化の力』を作成すると聞いたときは、本当に自分たちがこのようなものを作れるのだろうかと思いました。作っていく過程はやはり難しく、たくさんの方の困難に直面しました。しかし完成したものが手元に届き、見たときの感動はあまりにも大きく、その達成感は想像をはるかに超えていました。私にとって『文化の力』を作成できたことは、大学生活における貴重な経験であり、財産だと感じています。ありがとうございました。

堀 智視

『文化の力』はみんなで一から企画・編集して作り上げたものです。雑誌制作は初めてで、一筋縄ではいかないことも沢山ありましたが、とても貴重な経験となりました。

この雑誌を通して、私たち文化学部の学生の思いや活動が少しでも皆様に伝わると嬉しいです。

ぜひ、学内外問わず多くの方々に読んでいただきたいと思えます。

雑誌制作にご協力いただいたすべての方々に感謝致します。ありがとうございました。

宇都宮千穂（担当教員）

『文化の力』第4号をお届けいたします。第1号の出版から4年、最初は教員が企画も編集も行っていた雑誌でしたが、昨年度から学生が中心となって製作しています。今年度は、「安藤桃子さんにインタビュー」という企画がたてられ、ダメでもともとだとお願いしたところOKをいただきました。お忙しいなか安藤さんは大学まで来てくださり、学生と長い時間をとって話をしてくださいました。そして学生たちは「映画監督・安藤桃子」から、なんと写真の撮り方まで習っている・・・なんと贅沢な！と物陰から思う教員でした。帰り際、安藤さんは、「学生のことはできるだけ協力したいと思っています」とおっしゃいました。本学の教育や研究は、安藤さんのような思いのあるの方々によって支えられているのだとあらためて実感しました。安藤さんをはじめ、ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。今後とも、どうぞよろしく願い申し上げます。

大学的高知ガイド —こだわりの歩き方

土佐高知には、こんなにも豊かな文化・歴史があったのだ！

小松和彦（国際日本文化研究センター所長）推薦

この本を携えて、土佐の海と山、東と西、伝統と創造、
祭事と日常生活等々、多様で対照的な自然と文化が織りなす、
驚きいっぱいの高知県を巡り歩き、学び極めよう。



高知県立大学文化学部編
昭和堂 2019年
本体価格 2,300円
ISBN 9784812218174

目次

第1部 まちをあるく

高知城—天守は復古形式と新しい手法の統合か（三浦要一）
高知城と高知県庁を見ながらまちを歩く（清水直樹）
「新聞の葬式」にみる高知と自由民権（ヨース・ジョエル）
旭町「いま」と「むかし」を歩く（宇都宮千穂）

第2部 歴史文化を訪ねる

土佐ことば（高知県方言）（橋尾直和）
『土佐日記』の史跡探訪・聖地巡礼（東原伸明）
土佐の清流文学（芋生裕信）
高知漢詩散歩（高西成介）
いざなぎ流と土佐の神楽（梅野光興）
長宗我部氏の居城—岡豊城から浦戸城へ（宅間一之）
ジョン万次郎の捕鯨—浜の鯨と沖の鯨（山口善成）
坂本龍馬関連施設のみどころ（亀尾美香）

第3部 食と自然を旅する

高知市内の災害と寺田先生の気配に出会う（大村 誠）
高知の庭の物語（長谷悠紀）
食を通じたまちおこし（梶原太一）
トウモロコシと山の暮らし（川上 香）
大川村の謝肉祭（飯高伸五）

第4部暮らしから学ぶ

民具とまちおこし（橋尾直和）
なぜ、今、「市」なのか—顔の見える「小さな経済」（宇都宮千穂）
戦前の移住地に映る高知県漁民の暮らし（吉尾 寛）
いろは丸と海難審判（菊池直人）
高知の人々と書法（岩倉秀樹）
地方交通と農山村のみどころ（井本正人）

ほか「高知県立高知城歴史博物館」「高知市立自由民権記念館」などコラム多数

文化の力 Vol.4

2020年3月31日発行

発行 高知県立大学文化学部
〒780-8515 高知市永国寺町2番22号

印刷・製本・デザイン
有限会社 近森謄写堂

